源氏物語々釈

源氏物語語釈一之巻

○これに挙る語どもは、本文の頭にかくべきことなるを、釈の長くして 又これをあらためず。釈の末に訳語をものせるは、本文の傍にしるせたる所にしたがひて、其ついでに余が説を交へたる所などなれば、今 さても猶しられがたきは、疑はしきよしを記して後人の考をまつ。こ心得がたき語どもは、諸注の説を悉く挙て、末に余が今按を注しつ。 もを挙て、その違へるよしを弁まへいふべきなれど、いたづらにことやおぼゆるとは、余が今按をのみ注しつ。それはた一ッづつ其旧説ど る訳注の意をしらしめんとてのわざなれば、 初の巻に見おとして、後の巻にて解たる類もあれど、先達の注せられ ままに、体言用言のけぢめもなく、さながらにしるしたれば、下に某 さて、しるしもてゆく語どもは、おのおの其巻の中に見えたる次第の れら皆やむことをえぬしわざなれば、見ん人さるかたにゆるしてよ。 長くなりてわづらはしければ、はぶきて其故をばことわらず。又いと たるものから、いづれの抄にももれたる詞と、その解ざまのいかにぞ 丁としるせるに見合せて、そこの意をさとるべし。又いづれの巻にま いづれもそのはじめて見えたる所に就て見るべし。其中に、たまたま しがたき故に、別に記して、これはいかなる義の詞也といふ事を示 一たび注したる語は、末の巻々にいたりてもふたたびは挙ざれば いづれも先達の注どもを撰びて、そのよろしきをのみ採用ゐ 引合せ見て其意をさとる

くの例どもをかいあつめて、其詞のしかる意をばさしも委しくは注せ望の雅言集覧ばかりくはしきはなし。されど、彼書のおもふきは、多○物語ぶみどもの語をあつめて釈たるもの、これかれある中に、石川雅

でれば、今はその例どもをばかの書にゆづりて、いたくは挙ず。ただ本文にくらべ見て、いちはやくかかる意ぞとしらるるをむねとしたれば、さる心して見るべき也。又鈴木朗の雅語訳解といふもの有。はつかなる物なれど、今世のさとび言にあてて解たる書にて、初学にたよりある事どもおほし。されば、今もかの書の訳に今案をまじへて注しつ。圏の中に雅集と記すは雅言集覧、訳解としるすは雅語訳解なりとつ。圏の中に雅集と記すは雅言集覧、訳解としるすは雅語訳解なりと

○巻中にかぎりもなく多く見えたる語の今世の耳に遠きを、いささかこの巻中にかぎりもなく多く見えたる語の主緒・あゆひ抄などに従ひて、そすべて省つ。てにをはの事は、詞の玉緒・あゆひ抄などに従ひて、その意をさとるべし。さて又、本文の頭書に其意を注し尽せる語は、此の意をさとるべし。さる以本文の頭書に対している。 をり。

などには殊に多し。
はべる
・一般鈴屋翁の説に、「はべる」は匍匐といふ意にて、貴き人のはべる
・一般鈴屋翁の説に、「はべる」は匍匐といふ意にて、貴き人のはべる。
・一般鈴屋翁の説に、「はべる」は匍匐といふ意にて、貴き人の

聞えといふ詞に拘らずして、そこの意をさとるべし。 電もなくて、言の調にただかろくそへていへるのみなる所もあり。そは 京もなくて、言の調にただかろくそへていへるのみなる所もあり。そは がいる事として違ふことなし。さて又、まれにはいふといふばかりの 耳に聞ゆるを、受るかたの耳につきて聞ゆとはいへる也。されば、いづ ないる。さるは、口にいへば

て釈べし。
て釈べし。
の事と聞しむる類の語也。されば、意もそこの前後に随ひといひて、その事と聞しむる類の語也。されば、意もそこの前後に随ひおていかがしく聞ゆる所をまぎらはす詞にて、俗言に何シテ、何ガなど 地でいかがしく聞ゆる所をまぎらはす詞にて、俗言に何シテ、何ガなど

おもふ給ふる 国「給ひて」を「給ふて」とあるも音便ながらよろしとも聞えず。「思ひ給ふる」を「思ふ給ふる」とあるも同じ。又此おのがうへにいふ「給ふる」のはたらきの「給へ」を、「給ひ」とあるはのけぢめある事なるをや。

釈右の説にいはれたるごとく、「思ふ給ふる」とては、思ふと給ふるとれかれ見ゆめれば、「思ひ」を訛りて「思う」ともいひしにや。さらこれかれ見ゆめれば、「思ひ」を訛りて「思う」ともいひしにや。さらはうもじを活省きたるが多し。但し、中昔よりは音便にくづれたる詞どももでをば省きたるが多し。但し、中昔よりは音便にくづれたる詞どももで又、「給ふ」といふ語は、いにしへは詞の八ちまたにいはゆる四段さて又、「給ふ」といふ語は、いにしへは詞の八ちまたにいはゆる四段にのみはたらきて、「給へ」「給ふる」など下二段の格に活きたる事はなかりしを、この物語のころほひよりは、己がうへに下二段の格にいふことはじまれり。これはたとへば、今俗のせうそこぶみに御座候などいふは人のうへを敬ひていふ語なるを、転りては己がうへにもいふと同じ心ばへの語と聞ゆ。初学の輩は殊に心得がたきものなれば、暫く「給へ」「給ふる」とやうの詞を除きてそこのおもふきを心得べし。

んの歌これは詞の玉緒に「『ぞ』にかよふなん」といはれたる一種

の辞にて、此詞の係りたる末をば必けりをばける、なりをばなるとやうの辞にて、此詞の係りたる末をば必けりをばける、なりをばなるとやっただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、ぞといふに似たり。又と也。ただ調を緩らして文の勢ひを助くる辞にて、必りをばなるとやうの辞にて、此詞の係りたる末をば必けりをばける、なりをばなるとやう

此外にも多かれど、悉く挙るに遑あらず。なずらへて知るべし。かやうの詞俗にミエルといふ意なれば、いづれもさる意にて心得べし。かやうの詞「あンべかンめり」とやうによむなり。意は、俗にアリサウニミエルワ「あべかめり」とやうによむなり。意は、俗にアリサウニミエルワあべかめり」といふことを約めたるにて、

うち、ひき、かき、とり、おし、さし、もて、

釈かやうの詞は

が表った。ないへる発語にて、別に意のある事にはあらず。されど、紛らはしく聞ゆる所もあれば、さやうのところには本文の左に・・点をつけてしく聞ゆる所もあれば、さやうのところには本文の左に・・点をつけてしく聞ゆる所もあれば、さやうのところには本文の左に・・点をつけてしく聞かる所もあれば、さし、もて、

釈かやうの詞は

しき、しく < 駅これは物のありさまをたとへていふ辞にて、繁の意也のかやうの辞をすべて形容辞といふ。 たとへば、「恋しく」は恋の繁きしげき事を、古言にはしくといへり。たとへば、「恋しく」は恋の繁きし

たき、たく一般これも同じ類の形容辞にて、痛のいの省かれたる也。

ものの甚しきをいふ。 たとへば、「うれたき」は憂の痛き、「らうたき」は労の痛き意也。痛はたとへば、「うれたき」は憂の痛き、「らうたき」は労の痛き意也。痛は 身の痛きといふも、 しのびがたくはなはだしき意

何にても其さしたるさまに物の見え来るをいふ也。此意にていづれもた めき めく(釈これも形容辞にて、所見来の約まれる也。されば、

か、やか、よか、らか、どか どき、どく、 らぎ、らぐ、 づき、

形容をいふ辞なれど、 やぎ、 やぐ 言の意は詳ならず。 だち、だつ 釈この類、 なほ有べし。 みな

し、しも、を一般これはいはゆる助辞にて、語勢をゆるめてしらべは痛の意にて、こよなく重し。俗にヒドクといふにあたれり。 にも、「いと」はやや軽くして、俗言にズットといふにあたり、「いたく」 いたく 釈この二つは甚しき事をつよくいふ辞なり。 その中

を調ふる辞にて、 、ささか義のかはる所もあれば、まぎらはしきには例の・・点を左にも さして意ある事にはあらず。然れども、緩急につきて

○桐壺巻語釈

また伺候し給ふなり。 より転りては、ただ敬ひ詞にそへてもいへり。 ふにあたれり。貴人のありさまを伺ひ目守てつつしみ侍るをいふ。それ 守を延て「もらひ」といへるにて、さは発語也。俗言に、伺候するらざぶく。一丁オ(翻刻四ページ)(釈古言には「さもらい」といへ ここは女御更衣たちのあ 俗言に、伺候するとい り。

意よりいひて、 やんごとなき もだしがたしといふと同じく無「止事」也。 高き人をいふ 同(翻刻四ページ)。玉此言は、もとなほざりにしがたき

も、なほざりにしがたき意より出たる也

訳カクベツナ

えやむまじき事ありて出るをいへり。 をつつみてそれがうへに書ておくり侍ける」。此「やむごとなき」は、 えければ、二三日侍てやむことなきことによりてまかりたちければ、 りくだり侍りける道に、女の家にやどりて、 拾後撰集羇旅部のことば書に、「なかばらのむねゆきが美濃の国へまか いひつきてさりがたくおぼ

訳|ヨンドコロナイ。モダシガタナイ。

に同じ。 同(翻刻四ページ)(釈)「分際」の字にあたれり。今俗に分限といふ かぎりといふ意也。極みといふも同じこころなり。

ときめき 同(翻刻四ページ)(釈)時を得たりと見ゆるさまなり。 例の所見来を約めたる形容辞なり。 「めく」は

|余| 「めざまし」は、古へは目すさましき意なり。 めざましき同(翻刻四ページ)。玉此詞、巻々に数しらず多かるを、 醒」とあり。見ておどろくばかりのことなるべし。 のさめたるといふ意にて、善悪ともにつかふなり。 ひわたして考るに、さは有まじき事をと思ひて、 いきどほれる意の詞也 ッ。源平盛衰記七「目[×]中ごろより転じて目

訳アキレル。 イカガシイ。シングワイナ。

はすべて令字の意にて、我より彼に及ぶ意の辞なり。 同(翻刻四ページ)(釈)我を高くして人を貶しむるをいふ。 め。

みやづかへ 同(翻刻四ページ)(釈)「宮」は内裏の事、「つかへ」は此方 てみやづかへといへり。 より使はれ奉るをいふ。さて転りては、 大宮ならぬ所に仕ふるをもすべ

訳ゴホウコウ。

あつしく同(翻刻四ページ)「余」小町集に、 「人しれぬわれか思ひにあは

さはやかに見え給へば」などあり。すべて病者は身に熱の有てあつきも 身もあつきここちして」、若菜下に「御身もぬるみて御ここちもいとあ つしう」などいへるやうになりたるならん。 のなれば「あつし」などいひならひたるが、末には病とだにいへば「あ ぬまは身さへぬるみておもほゆるかな」。夕顔の巻に「御ぐしもいたく しけれど」、手習の巻に「うちはへぬるみなどし給へることはさめ給ひて、

・ コレニテ事・ コレニテ事・ カー本ニ上句「わがおもふ人にあがおもふ人にあんにありた」

リ。普通ノ板本ノ意 キコ エタ

玉身よわく病あるをいへり。拾遺に「病の重きを厚しといふにや」 、へるは、 物語にてはかなはず。

訳不快ナ。ワヅラフ。

意也。けはサウニと訳すべし。 けて心ぼそき也。げは気にて、さるけしきに見ゆるを他より見ていへる のづから然る意也。ここも其意にて、何といふこともなくただ物事につ とをそへていふ詞は、物事につけて云々といふ意にて、ただ何となくお もの心ぼそげ
同(翻刻四ページ)(釈すべて「もの云々」と物といふこ

ふ類はみな此多の字なり。
 堅多心」」。 さとがち同(翻刻四ページ)||拾和名云、 師説、多心読」奈賀古可遅」。 これによるに、 「周易説卦云、其於」木也、為 「何がち」 とい

事也。ここもその意にて、おのが身にかからぬ人までも何といふことな しに目をそばむる也。 あいなく 同ウ(翻刻四ページ) [玉]此詞数もなく多く有。そをことごと わたし合せて考るに、 注に「無」愛也」「あぢきなく也」などいへる、 何といふわきまへもなしにうちつけに物する み

訳ナニトナウムサト。ナンノハリ合モナク。

いはれたるはいかがなれど、 「般新釈に、「愛敬なきを略して愛なきといふ也」とある、「略して」と なほ愛なきの意にはあるべし。 何といふこ

> となしに打つけにものするも、 にはあらず やがて愛のなき意なれば、 いたく違へる

見がたきやうの意なるべきにや」といへるごとくにて、なべて人に目を るとはたらく辞也。側へ向てまさしく向はぬ意にて、物妬するさまなり。 まばゆき 同(翻刻四ページ) 玉拾遺に、「日のかがやく時、まばゆくて そばめ 同(翻刻四ページ) 駅「そば」は側字の意。 めは、 め・む・む・む・

あぢきなう 同(翻刻五ページ) |新|人の情を五味に譬へて、うまし・か そばめらるる、 らし・にがしなどいふ中の、 しといふなり。 これまばゆきなり。 にがにがしきといはんがごとき事を味気な

訳フアンバイナ。ムヤクナコトヂヤ。ラチモナイ

無」。契沖云、「せんかたなし」。史記伍子胥伝、無益をアヂキナシとよめり。 宣長云、「俗言に、 いらざること、むやくの事といへる意なり」。

るもはしたにて、ゐ給へり」といふに同じ云々。 などかけり。是にて心得べし。竹取物語に、「宮は、たつもはした、 はしたなき のひとつに、「人をよぶに我かとてさし出たる、まして物くるるをり」 同 (翻刻五ページ) |拾||枕草子に、「はしたなき物」といふ ゐ

などいふ意也。 |金俗に「どちらつかず」といふ意なり。又「めつたに」「ひよんな事」

訳フツガフナ。ツキモナイ。思ヒガケナイ。ツキホガナイ。 フサウオウナ。

な同じおもふきなり 御心ばへ 同 (翻刻五ページ) (釈)心延の意にて、心のひき延て出るおもへ ふきをいふ語也。心のさしゆくを志といひ、 心の馳出るを意といふ、 み

ココロムケ。オモヒナシ。

はなやか同(翻刻五ページ)(釈花のごとくめでたきよしを譬へていふ し」にて、 よしある 二丁オ(翻刻五ページ)(釈)「よし」は、ゆゑよしなどいふ「よ 由緒あるといふに同じく、種姓のいやしからぬをいふ。

といへるや、 はかばかしき同(翻刻五ページ)(釈)「はか」は、或説に「極処の意也」 やかはそのたとへたる形容の辞なり。 よろしからん。極処のなきは、ただよはしくたしかならぬ

うしろみ 同(翻刻五ページ) 釈後の方は見えぬものなる故に、 その反にて、たしかなる事をいへり。しきは、例のしげき意の形容辞なり。 もの故に、たしかならぬことを「はかなき」といふ。「はかばかし」は 訳シツカリトシタ。 いとお

と也。雅言には「うしろむ」と、はたらかしてもいへり。 ぼつかなきを傍より見て助くる意也。今俗字音に「こうけん」といふこ

るじながらもえてしがなねはしらねどもひきこころみん」。すべて「こと」 といへばかぎりなき御心のふかきになん」、著聞集に、「ことといへばあ といふ詞は、とりたてて其事をするにいふ詞也。 ととふききぬ白たへのわがときごろもぬふ人もなし」、 野分巻に「こととなれなれしきにこそはあめれ」、家持集に「秋風はこ こととある時は同(翻刻五ページ)(余一帯木に「こととあかくなれば」、 椎が本に、「こと

子の縁などもみな前世の宿縁にてなれるやうにへれば也。人のしあはせ らかなる御子をさへうみ給ふ、といふ意也。さるは、仏説には、夫婦親 なしかり。ここは、『帝と更衣とは過去の世より御因縁や深かりけん、清 ほし。「ちぎり」といへるは、すべて前世の宿縁といふこと也。 仏説のはびこりたる世なりしゆゑに、何事にもかの詞にていへることお さきの世も御契や同(翻刻五ページ)(釈)この物語のころは、むねと 次下み

のことに「すぐせ」といへるも、宿世にて同じ意なり。

の副たる意ある也。 らはしきなり。よくよく思ひ弁ふべし。 さへ同(翻刻五ページ)(釈)万葉集に副字をよめる意にて、ものごとのそ ふ時にいふ詞也。俗言には、だにといふべき所をさへといふ故に、まぎ さへは、 よく考へ見れば必もの

にかける楊貴妃のかたちは云々、 ほふ」とよめる、これなり。朝日のにほふ、花のにほふなど同じ。 御にほひ て見るべし。 同ウ (翻刻六ページ) |拾|遊仙窟、并に万葉集に、艶の字を「に いとにほひなし」といへり。とり合せ 下に「ゑ

余光あるやうの事を「にほひ」といへり。香のことにいふは、転りたる (釈)言の本は、赤土のいろよきを土秀といふより出て、色のうつくしく

かしづき同(翻刻六ページ)【雅集】養ひ育つる意と、ひたすら大事にす ふ也。されば、色つや、光などをも、時によりていふなり。 |雅訳||いふにいはれぬうつくしさの、其本質をはなるるばかりなるをい

あらんか。転りては、ただ大切にしていたはりそだつることにいへり。「か 釈此語のもとは頭衝にて、かしらを地につきて敬ふ意より出たるにも るとをいふ。

わりなく 同(翻刻六ページ) 玉あるまじき事をしひてあながちにする しづき」と体言にいふは、其人のうしろみの人の事也。 思る事也。

新「ことわりなく」の略にて、さは有まじきを知ても、 してなす時にいふ語也。 おもふに堪ず

釈この説、「ことわりなく」の略といはれたるは、本末たがへり。 わり

とわり」は、事理の意也。 といへるが、やがて条理などの字にあたれり。 「わり」は条理の事也。

訳メツサウニ。ムシヤウニ。ムリニ。

余このうへもなきことをいへり。 歌詞には、 せんすべなしといふ意に

釈此巻の下に「待すぐす月日にそへて、いとしのびがたきは、 訳 シカタガナイ れは、事理なくなりてせんかたのなき意より転りたるなり。 わりなきに」などあるは、せんすべなしといふ意につかひたるなり。 つつなげく」、 きわざになん」、又「をとこ女、いとわりなきわざかな、といひあはせ 帚木に「女はこの人のおもふらんことさへ、しぬばかり わりな

されとなほ、其うちに管絃もこもれり。 心につくべき御あそびをし云々」とあるは、広く遊戯の事をさしたる也。 なれば也。今俗にいふとはいささかことなり。但し、この巻の末に、「御 むる事をいへり。さるは、あそぶ事どもの中に、管絃はむねとあるもの 御あそび
同(翻刻六ページ) 釈遊といふは、大かた管絃して心を楽し

にもいへり。ただ貴人の寝給ふことと心得べし。 る天皇の御事にのみ申せる語なるべし。うつりては、さらぬ貴人のうへ 大とのごもり
三丁オ(翻刻六ページ)(釈もとは大殿に隠りて御寝ませ

訳御寝ナル

やがて (翻刻七ページ) |玉]すべて「やがて」は、 直にそのままとい

釈此詞、 しき也。 俗言にはオッツケといふが如く、 ゆるくつかふ故にまぎらは

訳スグサマ。 サッソク。 コレガスナハチ。 トリモナホサズ。

> 強てあさり求るよりいふ也。 あながちに同(翻刻七ページ)「新」此文にては強てと云がごとし。本は 斉明紀に、 三覇蝦夷戸口。 孝徳紀にもあり。このあなぐるに同じ云々。

釈穿鑿の意なり。

訳メッタムシヤウニ。ムリヤリニ。

置といふことの活きたるなり。 釈雅言にはかくはたらかして、 おきてたれば同(翻刻七ページ)一新おきては掟なり云々。 おきて、 おきつ、おきつるとも云り。

訳サダム。決断スル。

むるをいへり。ここは嫉妬してとかくの給ふをいふ。 といへれど、いにしへは然らず。すべて然るべからぬ事として禁いさめ 同(翻刻七ページ)(釈後世には、君父などに諫言する事をのみ「い

毒に思ふといふ意にいへり。又心にかかりて案じるといふ意にもいへり。 こころぐるしう同(翻刻七ページ)」玉此詞は、多く今世の俗言にも気 ここは、弘徽殿のおぼすところをきのどくにおぼしめす也。

てといふ意に添たる辞なり。又此下に「はかなく聞えいづる言のはも」 かばかし」の反にて、たしかならぬ意也。「もの」は、例の物事につけ ものはかなき同ウ(翻刻七ページ)(釈)「はかなき」は、上にいへる「は などあるは、何と定まりたることもなくといふ意也。

ニゲナウチョト。ツイチョット。 訳 ワケモナイ。トリサダメヌ。ラチモナイ。ナンデモナイ。 ○またナ

たるにて、俗にナマナカといふにあたれり。 なかなか同(翻刻七ページ)(釈中にありて何かたへもつかずただよは しき意を本にて、却てといふ意に転し用ひたり。ここはそれを体言にし

訳ケック。

シカラズキツウ。この外にもなほさまざま也。其所々にて訳語をかへて 法外ナ。あやしく云々は、メイヨニ云々。キドクニ。ヘンナコトデ。ケ **|雅訳||ザマガワルイ。ミグルシイ。フシギナ。ケシカラヌ。イフウナ。** すべて奇妙なる事、不思議なる事のよのつねならぬに、ひろくつかふ語 繁き意の形容辞にて、「あや」といひておどろかるる事の繁きを本にて、 あやしき同(翻刻八ページ)(釈)「あや」は驚く声なり。「しき」は例の ここは奇怪なるわざといふ意にて、 案外なるしわざをさしたる也。

ごと」といふ時は、小児の戯れなどの意となりて、 訳ムホウナ まさなき同(翻刻八ページ)(釈)正無にて、正しからぬをいふ。「まさな いささかたがへり。

ていへる也。ここは得不」去にて、不」得」去といはんがごとし。これにていへる也。ここは得不」去にて、不」得」云々」などいふまって、即この得を音便に引にて、漢文に得三云々」、また不」得三云々」などいふ意の得を先ッ言のえさらぬ 四丁ウ (翻刻八ページ) (釈)すべて「え云々」といふは得の意えさらぬ 四丁ウ (翻刻八ページ) (釈)すべて「え云々」といふは得の意 准へていづこをもさとるべし。

語のもとは「斎じき」にて、甚大事などある時、物いみつつしむより出語のもとは「斎じき」にて、甚大事などある時、物いみつつしむより出いる。此 五丁オ(翻刻九ページ)「新」ここには厳重こころにいへり。

はる事もありて、しか一向には定めがたければ、本文はその所の意にし およずけ同(翻刻九ページ)「新」万葉巻五に意余斯遠波と有は、「老をば」 たがひてさまざまに訳語をかへたれば、さるこころして見るべき也。 キツイなどいふにあたれり。されども此語は、其さしたる事によりてか る事に、何事にもわたりてことひろくつかひたり。訳はエライ、 釈言のもとは此説のごとくなるべし。さて転りては、甚しき事、 ヒドイ、 大‡ な

りゆくほどの事にもいひしなるへし。「およづけ」とかくべし。 也。これによるに、「およづけて」は「孝行て」てふ意にて、俗に「と ふと書たる、是なり。さて、それを転じては、乳児のやうやうひととな しよりめきて」といふに同じ。帚木巻の末に、 光源氏のおよづけての給

釈此説のごとくなるべし。これはもとよりつを濁りていひし語なる故 しばらく「す」と書つ。 に、混ひてすの濁を書しなるべし。されど、思ふむねもあれば、仮字は

|雅訳||ヒトトナリテ。チヱガツイテ。「およずけの給ふ」は、オトナシヤ カニオホセラルル。

あさましき 同 (翻刻九ページ) [玉]此詞は、よき事にもあしき事にもい ありがたく イといふ意也。 今俗かたじけなき意にいふは、いたく訛りたるなり。 同(翻刻九ページ)(釈)有ことの難きにて、俗にメツタニナ

ひて、 **|新**|このみこの世にめづらしきを驚きあさむといふ、即是にて、 俗言に「けしからぬ」「きものつぶれた」などいふ意也。

濁るなり云々。

く世にいひなれたるに随ふ。「あさまし」と「あさむ」とは同言也。 たるは、ひがことなり。「さ」を濁るといふはさも有べけれど、しばら **|釈新釈の此次に、「あざまし」と「おぞまし」と音の通ふやうにいはれ** に驚く意なり。

訳ヒトシホ。 りたる語にて、 いとど

六丁オ(翻刻一〇ページ)(釈いといとと重ねていふを更に約め濁 ある事のますます甚しくなれるやうの所につかふ語也。

ける。をのの春風 て侍ける時に、女のとふらひにおこせたりける返り事によみてつかはし われかのけしき 同(翻刻一〇ページ) (余)古今集雑下、 あまひこのおとづれしとぞ今はおもふわれか人かと 「左近将監とけ

身をたどる世に」

る。 雅集。和泉式部集上、「人のもとにわすれぐさしのぶぐさつつみてやると 人かと身をたどるといふに心同じく、我にもあらずといふ意也。 物おもへばわれか人かのこころにもこれとこれとぞしるく見えけ 夕顔に、「あせもしととになりて、われかのけしきなり」○われか

ふたがるのみにてふたがらぬひまはなきよし也。 て、他の所はふたがらざる意にはあらず。「ふたがり」の下にある意にて、 御むねのみ 同(翻刻三ページ) 国かやうののみは、胸のみふたがり

釈「のみ」の訳は、バカリ。

御むねのふたがりたるが、ぢつとしてゆるばぬ也云々。 どいふ「ぢつと」の意にて、「ぢつと」は即此「つと」の訛れる意也。 同(翻刻二パージ) |玉|「つと」は、俗言に「ぢつと見てゐる」な

と緩き語にて、ここの勢ひにかなはず。ここは更衣のうせられたるをき いふ言にて、いちはやく急にさしつめたる意の語なり。「ぢつと」はい郷との説はいかがなり。「つと」は、俗言にもヅト、ヅットなど濁りて こしめして、御胸のにはかにづとふたがりたる也。

ふにあたれる語なり。 いふせさ 同(翻刻二ページ) | 新本は物の内にこもりてある心より出て 露をもしか名づけたるか、 いささかなる事に借ていへるか、はたいささかなるをいふがもとに 同(翻刻一パージ)(釈露ははかなくいささかばかりおく物なる故 其はしられねど、意は俗言にチットとい

ほつかなく」とも「いふせく」ともよめり。 いづれにもおぼつかなく思ふをいふなり。古書に「鬱悒」とかきて、「お

ルサイ。シンキナ。 雅訳悪き物を見聞し、 悪き事を思ひなどして、 心よからぬさま也。 ゥ

> あへなくて 同(翻刻二ページ) |玉|俗言に、はりあひなく力の落たる

義は同じ。 といふにあたれり。「云々あへず」といふもえこらへぬ意にて、 やうの意にいへり。敢なくはその反にて、すなはち力なくはりあひなし 釈無、敢なり。敢はつよくおすやうの意、又つよくおさるるをこらふる あへの

訳ラチノアカヌ。ハリアヒガナイ。「あへず」は、エモチコタヘヌ。トゲズ。

「かひ」は代の意にて、 いふかひなし(翻刻一三ページ)釈其事をいひてもかひのなきよし也、 かはりといふに同じ。

雅訳。ラチノアカヌ。「いふかひなき者」は、ナンデモナイモノ。

煙の縁あればなほ別なり。 末なり。ここは今俗に、ただ慕ふ事をこがるるといふと等しく聞ゆれど、 していへる歌詞なり。それより転りては人をしのぶ事にもいへど、そは こがれ(翻刻一三ページ)(釈焦れにて、もとは心火に胸の焦るととりな

たり。ここは永字の意なり。 永字をヒタフルとよめるを思ふべし。さて転りては、 ひたふるに(翻刻一三ページ)(釈言のもとは直経なるべし。日本紀に、 一向の意につかひ

訳ヒトスヂニ。ムシヤウニ。ナガナガイツマデモ。

念な」といふかたにおほくつかひたり。 との惜き意にもあらんか。用ひざまは、 くちをしう
八丁オ(翻刻一四ページ)(釈言のもとは朽惜にて、 俗にいふと同じきうちに、 朽るこ

ザンネンナ。 **|雅訳||エエラチガアカヌトハギシミスル。ニガニガシイ。** ノコリオホイ。

同(翻刻一四ページ)(釈先達愛痛と解れたるごとく、

かたちのうつくしかりしよしなり。はその所々に随ひてあつべし。ここはめでたくありしの約にて、更衣のることのいたく甚しきをいふ詞なり。何事にもひろくつかひたり。訳語

訳 ナンガナイ。「めやすき人」は、ミグルシカラヌヒト。

アイソナクといふ意に似たり。諸注いづれもわろし。すげなう。同ウ(翻刻一四ページ)(釈)この語は今の俗言にもいふことにてすげなう。同ウ(翻刻一四ページ)(釈)この語は今の俗言にもいふことにて

りなんや、との給ふ」云々。いふなり」。常夏巻に、「この御方のすげなうもてなし給はんには、たてすげにさして、うちそばみ君ひとりみよまろこすげまろは人すげなしと気蜻蛉日記下、「かへりことを、おやはらからせいすとききて、まろこ

をかしき 九丁オ (爾列二式ページ) (釈此語は、もとをこといふことをはたらかして、例の「しき」といふ形容辞を添たるなり。されば、仮字はがもじをかくべし。さて意は、おもしろき事、風流なること、めでたで、実はしき事にもつかひたり。さるは、をこなる事は笑はしきものなれば也。さてその笑はしきよりおもしろき意にも転り、おもしろきよりみやびたること、心にくき事にも知る也。玉がつまに、田中道麻呂がみやびたること、心にくき事にも転れる也。玉がつまに、田中道麻呂がみやびたること、心にくき事にも転れる也。玉がつまに、田中道麻呂がみやびたること、心にくき事にも転れる也。玉がつまに、田中道麻呂がみやびたること、心にくき事にも転れる也。玉がつまに、田中道麻呂があやびたること、心にくき事にも転れる也。玉がつまに、田中道麻呂があやびたること、心にくき事にもいるできなが、このこと先輩もこれかれ論じたることあり、おのれも委しき論あれど、ここにははぶきつ。

うち見るのみのことにはあらず。ここも更衣のさとの事をふかくおぼしるをいひて、大かた物思ひのある時に空を見ることなどにいへり。ただるがめ 同オ (翻刻 | 五ページ) (釈)すべて「ながめ」は、物を永く見つむ

は異也。眺望を「ながめ」とよめるもあるは、永く見わたす意なり。字を「ながめ」とよめるは、うたふ時に言をながくする意にて、これとめして、命婦を出し給へる後もなほそなたの空をながく見給ふ意也。詠めして、命婦を出し給へる後もなほそなたの空をながく見給ふ意也。詠

訳ヤウス。ソブリ。ケブラヒ。をいふ語也。されば人のありさま、所のけしき、様体のことなどにいへり。をいふ語也。されば人のありさま、所のけしき、様体のことなどにいへり。釈気延の意にて、けしきの延いづる形容

をみに 十丁オ (翻刻一六ページ) [新] 「とみ」は頓の字音といふ説、さ

雅訳とは疾なり。急。「代実録十三宣命、「早仁罪那倍不賜云々」。「雅集」俗の急早速の意なり。三代実録十三宣命、「早仁罪那倍不賜云々」。

はなりがたかるべし。(釈今案に、雅語訳解の説は、みもじをいかになほ頓字の音といふかた

たどられし 同(翻刻 - 七ページ)(釈)「たどる」は手取の意を本にて、くらき所をさぐりさぐりものするやうのことに用ひ、転りてはうたがはたるかたにつきて「たどられ」とはいへる也。また「たどり」と体言にいへるもあり。これは疑ひて物とふ事に転していへる也。又「たと体言にいへるもあり。クやみは道たどたどしなどの類なり。みなこどたどし」といふもあり。夕やみは道たどたどしなどの類なり。みなこの意に同じ。

訳段々。ソロソロ。シダイシダイニ。とはいたく異なり。また様々の字音にていへるもあり。別なる詞也。といへるなり。意は、つぎつぎに物事のすすみゆくことにいへり。俗言やうやう」同(翻刻一七ページ)釈/漸々といふを、音便に「やうやう」

だに 同ウ (翻刻) セページ) [雅集]俗語のスラ、又ナリトモ、デモ、セメ

[雅訳]云々ナリトモ。云々サへ。テの心をそへたるもあり。ヤウヤウ、コレバカリとうつすべきあり云々。

釈雅訳の二ッにて大かたことたるべし。

へり云々。 也。ここも、仰事のたまふが間にまた人めをもつつみ給ふ故に、且といかつは 同 (翻刻) セページ) (新)担てふ語は、左する間に右する時にいふかつは

ひとしかるべし。マアと訳すべき所もあり。「雅集」此と彼と、物二ッまじはる時にいふ詞也。カタヘハなどいふ詞と

物をまずる意也、といへり。この説しかるべし。彼と此と交るやうの所にいへり。和は、かて、かつ、とはたらく言にて、釈秋元安民が説に、此語はもと和といふ言より出たる也。さる故に、ひとしかるべし。マアと訴すべき所もあり。

は、ソロソロト。小口カラ。|雅訳]カタテマ。半分の意也。「かつは」は、一ッハ。カタココロ。「かつがつ」

、の野に霜ふらばわが子羽裏天のたづむら」。 でもておほひつつみ養ふより出たる詞なり。万葉九「旅人のやどりせ羽をもておほひつつみ養ふより出たる詞なり。万葉九「旅人のやどりせったる事也。仏神のあはれみ守らせ給ふ事にいへるも同意也。親鳥のはぐくむ 十一丁オ (翻刻 □ 八ページ) [雅集]俗と同じ。妻子、又なべて

釈もし此意ならは百石城にや。

づけて用るなり。たとへば、我に凶事あれば人にいまれ、人に穢あればゆゆしき大事、ゆゆしくおぼす、これら皆一つ語なるを、さまざまになゆゆしき。同(離刻一九ページ)「新ゆゆし、いまいまし、いみ、いむ、いつく

及いむ、是を「いまいまし」といふ。又は、我に吉を用る時は人の 以をいむ、これを「いはふ」といふ。神の御事、又大切に思ふわが君な どを「いつく」といふも、凶をいむよりいへり。さてそのいみの語を約 どを「いつく」といふも、凶をいむよりいへり。さてそのいみの語を約 どを「いつく」といふも、凶をいむよりいへり。さてそのいみの語を約 でしたいむ、これを「いはふ」といふ。神の御事、又大切に思ふわが君ないとゆゆしうおぼすとあるも、いづれつつしまるる方也。歌に「色にいいとゆゆしうおぼすとあるも、いづれつつしまるる方也。歌に「色にいていないむ、是を「いまいまし」といふ。又は、我に吉を用る時は人の つしむ事なるを知るべし云々。

もいふ時、ケシカラヌ、ヒドイ、エライの心なり。は「忌々し」なり。さる故に、いまはしき心もあり、又すぐれたる事を「雅訳」大切ナルコト、犬ソレタルコト、アヤフキコトなどに皆いふ。本

(釈)忌々しき意、諸注のごとし。此詞、自他にわたりてなべてならずよの方で、末はさまざまの意に用ひたる中に、ここは源氏君をなべてならずすぐれてうつくしとおぼす也。『ゆゆしき大事』などいふ『ゆゆしき』をある下の玉小櫛に、「すべて此詞、本は斎々しなるを、次々にへり」とある下の玉小櫛に、「すべて此詞、本は斎々しなるを、次々につりて、末はさまざまの意に用ひたる中に、ここは源氏君をなべてならずすぐれてうつくしとおぼす也。『ゆゆしき大事』などいふ『ゆゆしき』に同じ云々」とあり。

釈

り出たり

[雅訳]書簡。口上。アンナイ。オトヅレ。へるも、音信のかたにつきていへる也。案内することをいへるも同じ意也。釈)消息はいづれも音信の事にのみいへり。文の事を「せうそこ」とい

つれなき つらき 同(解刻: □ページ)(釈此語の本はいかなる義とも つれなき つらき 同(解刻: □ページ)(釈此語の本はいかなる義とも でる也。ここは死ぬべき命の死ずしてながらふるを、我につれなきさま へる也。ここは死ぬべき命の死ずしてながらふるを、我につれなきさま へる也。ここは死ぬべき命の死ずしてながらふるを、我につれなきさま でる也。

||雅訳||シラヌカホシテヰル。ジイットシテヰル。ドウヨクナ。ジャウガスの「向ウ(離別二〇ページ)||余||変沖云、くづれ折るなり。或云、万少し異なり。ムゴイ。ドウヨクナ。ウラメシイ。カナシイ。メイワクナ。少し異なり。ムゴイ。ドウヨクナ。ウラメシイ。カナシイ。メイワクナ。少し異なり。ムゴイ。ドウヨクナ。ジネットシテヰル。ドウヨクナ。ジャウガ

ラカス也。 [雅訳]「老くづをる」は、老クツスル也。「思ひくづをる」は、キヲクサ

くもなき意なり。人気なきといふ意なるべし。人げなき 同 (翻刻二ページ) (釈)人に人ともせられずして、人がまし

訳人ラシクモナイ。ミスボラシイ。

人わろく 十三丁ウ (翻刻三ページ) (釈)人の見聞のわろくして、此方

訳 ザマガワルイ。外聞ガワルイ。ミグルシイ。

らず偏屈なるありさまをいへるなり。偏屈にのびらかならぬをいふ。転しては姿の事にいへるも、のびらかな偏屈にのびらかならぬをいふ。転しては姿の事にいへるも、のびらかな

訳ブテウハフ。グチ。カタイヂ。

らず。万葉によめるには、此字の意によめる歌あり。きには不楽とも不憐とも書り。つれづれなるをのみさびしといふにはあきを「さうざうし」といふ。和語のならひ此類おほし。万葉に、さびしきを「さうざうしく」といふべ

国治遺にいへるがごとし。さてつれづれといふもさびしき事なるを、 国じさびしきもつれづれとさうざうしとは意異なり。つれづれとは、す のなくてひまにてさびしきをいひ、さうざうしとは、あるべき はってい

られずおぼつかなき意をたとへいふ語也。

|玉||此詞は後目痛といふ事にて、うしろやすきの反也。俗言に、気遣ひ||玉||此詞は後目痛といふ事にて、うしろやすきの反也。俗言に、気遣ひ

アンジラレル。 訳 フアンシンナ。キニカカル。ウサンナ。キガユルセヌ。手放シテハ

るさまをここにはいふ。神代紀に、「到二出雲之清地「素鵬、乃言曰、吾すがすがとも」 同(翻刻二四ページ) 新清々にて、心きよく奉りかねた

心清々之」、これなり。

訳 サッハリト。花物語月宴巻に、「すがすがしくもなしあけ奉り給はで」など見えたり。||金||此巻の末にも此詞見ゆ。又夕霧巻に、「すがすがしき御心にて」、栄

雅訳。テキハキト。キリキリト。「すがやか」は、サッソク。

て、たをやかにはあらざりけんといへるなり。 いへり。ここは楊貴妃の唐めきたるよそひは、あまりきつとしてかたくにはあらで、俗言に、きつとしてかたいといふ意、みだれず正しき意に言は、古書にては美麗の意なれども、物語などにいへるはただ美麗の意言は、古書にては美麗の意なれども、物語などにいへるはただ美麗の意

|余俗に「りつぱ」といへる心にあたれり。

転れるなり。一般端正の字によくあたれり。威儀のみたれず美麗にもてつけたるより、歌端正の字によくあたれり。威儀のみたれず美麗にもてつけたるより、

俗にいふ意とはやや異なり。詞をはたらかしたるにて、やはらかにしたしくむつましく思はるる也。同(翻刻三七ページ)国すべてこの詞は、「なつく」といふ

(駅)「なつく」は、馴着の意なり。「なつかしう」は、馴着まほしうおぼ

あり。「らうらうし」は、俗にいふ物の功者なる意なり。 **らうたげ らうらうし** 同 (翻刻二七ページ) 国此詞は、俗にあいら とは、其意いたくことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人 とは、其意いたくことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人 とは、其意いたくことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人

どくに思ふ意より出たる語也。さてそのきのどくに見ゆるものは、憐の(釈)「らうたし」は、労痛の意にて、苦労の多く甚しきを見ては、きの

たるものは何事にも功者なる意に転したる也。「らうらうし」は、労々しの意なり。これは功労の労にて、功労をつみかかるものなる故に、転りてはかはゆくあいらしき意にもなれるなり。

イッタタチ。らうは、本、労なり。労は、士官の年功のことなり。雅訳]カハユラシイ。ムゴタラシイ。「らうらうし」は、功者ナ。コウノ

できましう 同ウ (翻刻三七ページ) (釈)此詞は、「すさぶ」といふ語を、例の「しく」といふ形容辞にてはたらかしたる也。さてつかひたる意は、例の「しく」といふ形容辞にてはたらかしたる也。さてつかひたる意は、など、次おこさぬすびつ・火桶、方たがへにゆきたるにあるじせぬところ、ましてせちぶんはすさまし」などある、いづれも不用に不興なる意也、ここは、かかる御悲しひのをりから、面白き物の音をきき給ひて、帝のてこは、かかる御悲しひのをりから、面白き物の音をきき給ひて、帝の不用におもしろからずきこしめす意也。

訳不興ナ。フキゲンナ。モノスゴイ。セハシナイ。

のうかとも含素、と見つごうとう。ここは耳ずつりことだっています。ザハリニオモフなり。「物しと見る」は、目ザハリニオモフなり。を恨むる意の詞也。イカガシイ。ドウヤラシイ。「物しと思ふ」は、キを恨むる意の詞也。イカガシイ。ドウヤラシイ。「物しと思ふ」は、キをしむる意じきことをと、人

たく異也。さて此詞、「ものうし」と似たる故に混ふる人もあらめど、かれとはいめて此詞、「ものうし」と似たる故に混ふる人もあらめど、かれとはい釈つかひたる意、此説のごとし。ここは耳ザハリニオボシメス意也。

雅訳見ル目ガ笑止ナ。キノドクナ。

かどかどし 同 (翻刻三八ページ) [拾]河最押立才 日本紀。今按、日本紀なるべし。 同 (翻刻三八ページ) [拾]河最押立才 日本紀。今按、日本紀なかどかどし

||正此説のごとし。今世の言にも「かどひしをたつる」などいふなり。

雅訳リハツナ。キハダッタキブン。カドヒシノアルキマへ。

の上などの意と思ふは後世の事也。
をほあさまつりごとは
十八丁オ(翻刻二八ページ) |新|「なほ」は、

訳ヤハリ。マダ。ドウシテモトカクニ。

るべきを、おとしたれば、因にここに書くはへつ。 歌の早朝の字をかくよめるをとりてかかれたる也。「猶」の注は上に入思ひて、天子朝とく朝廷に臨みて政事をきくもろこしのわざなり。長恨釈「あさまつりごと」は、朝政の字也。夜中にも民の訴あらんことを

等といふも、物の一つならぬ事也云々。 等といふも、物の一つならぬ事也云々。 (本てら」とも「ここら」ともひとついへるも、多き数とするなり。家口許々爾思出伊良奈家久曽許爾念出云々」とつづけいへるがごとし。家口許々爾思出伊良奈家久曽許爾念出云々」とつづけいへるがごとし。家口許々爾思出伊良奈家久曽許爾念出云々」とつづけいへるがごとし。家口許々爾思出伊良奈家久曽許爾念出云々」とつづけいへるがごとし。

釈この説はいかがあらん。されど、用ひたる意は数多き也。

葉に、回転などかきてまがれる道をたみたる道などよめり。 たみてなどいふたみにて、直からず横さまにゆがめるやうの意なり。 万たみでなどいふたみにて、直からず横さまにゆがめるやうの意なり。 反は、舌かいだいしき 同 (翻刻二九ページ) [玉]こはもと「たみたみし」といひたいだいしき

雅訳クワンタイナ。イカガナ。フススミナ。

れを転りては色めくなどをもいふ。「なま」といふ。譬へば、草の成定りてはこはこはしきを、わか草はう「なま」といふ。譬へば、草の成定りてはこはこはしきを、わか草はうなまめかしう。二十丁オ (翻刻三一ページ) (新物のまだよくも熟さぬを

きかはす」は、タガヒニアヂヲヤル。ジヤラヅキ合フ。(雅訳)フウリウナ。シナヤカナ。「なまめく」は、ジヤラヅク。「なまめ

たる也。 たる也。 たる也。 たる也。 たる也。 たる也。 たる也。 たる也。 にほひの袖にとまれる」。是は、余りなる思ふ事いとことさまになることの多きをもいふ。新撰万葉に、「ちると思ふ事いとことさまになることの多きをもいふ。新撰万葉に、「ちると思ふ事いとことでありぬべき」同(翻刻三ページ) [新]物の余りに重なり過、又

神なりといふも是なり云々。 右の意にもうつりて平穏に尋常ならであやしくよからぬ也。うたてある

ナ云々。「うたて」は、ヒヨンナコトヤ、重々アンマリ。[雅訳]イヨイヨワルイ。「うたてある云々」は、ヒヨンナ云々、メイワク

さがなくて 二十三丁ウ (翻刻三六ページ) [新]神代紀に、神性を「かむさが」とよみ、また仁徳紀に、伏祥を「よきさが」とも有て、其性はうまれつきたるくせをいひ、祥は気ざしをいへり。そのくせはた気ざしとこれらより転して、ここに「さがなし」といひ、次の巻にゆびくひの女を「さがなもの」といふ類は、わろき人、わろくせものなどをいふなり。を「さがなもの」といふ類は、わろき人、わろくせものなどをいふなり。

うけばりて 二十四丁オ (翻刻三六ページ) [玉]事のたらひてかげたるかいへる、まことに言の本の意は、人にうけらるる方より出たるにもあるいへる、まことに言の本の意は、人にうけらるる方より出たるにもあるいへる、まことに言の本の意は、人にうけらるる方より出たるにもあるいれる、まことに言の本の意は、人にうけらるる方より出たるにもあるいれる。 三十四丁オ (翻刻三六ページ) [玉]事のたらひてかげたるかずけばりて

ろにて、十分なるをいへり。(余)「うけばりて」とは、今の俗に「いつはいにする」などといふここ

訳オシハレテ。

のある時につかふ言にて、たとへばかれよりはこれはこよなくまされりこよなく 同ウ (翻刻三七ページ) |玉|此言は、必他に対へてくらぶる事

しより此詞のつかひたる意を見つけたる人なし。
云々。拾遺に、「こゆる事なき意也」といへるもあたらず。すべてむか聞えがたきやうなるもあれど、よく見ればそれもくらべたる所あるなりはど、といふにあたれり云々。其中に、くらべたる所のあらはにはなどやうにいひて、くらべていたくかはれる意なり。されば、俗言に「かなどやうにいひて、くらべていたくかはれる意なり。されば、俗言に「か

たく異也。思ひまがふべからず。みな此意也。万葉にもおほく見えたるを、かの歌どもによみたる意はい玉河海に、「昵近なれ。むつぶ事也」と見ゆ。此詞、物語文に見えたるは、

つきがたきにたとへたる語なり。 |新物の角あるは、したしくより

胎うつぼものがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなふ山の椎が本路うつぼものがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなふ山の椎が本路なってはものがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなふ山の椎が本路がつばものがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなぶ山の椎が本路でであるは色のがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなふ山の椎が本路でであるは色のがたり菊の宮の神歌に、「うばそくがおこなふ山の椎が本路でであるは

雅訳一不和なるさまなり。不和なる者、正めには向はずして側目にみる

七

故なり

れば、仮字もきびわと書べし。物を「ひわひわする」などもいふに同じく、幼くてよわきをいへり。然りを「ひわひわする」などもいふに同じく、幼くてよわきをいへり。然口之児ともいふは、鳥のひひなに譬へて黄といへり。「ひわ」とは、稚口之児ともいふは、鳥のひひなに譬へて黄といへり。「ひわ」とは、稚口之児ともいふは、鳥のひひなに譬へて黄といへり。「ひわ」とは、稚口之児といる黄

おふなおふな 三十丁ウ (翻刻四五ページ) | 新食な負ななり云々。伊勢おふなおふな 三十丁ウ (翻刻四五ページ) | 新食な負ななり云々。 然れば、わが物語に「おふなおふな思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくるしか物語に「おふなおふな思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくるしかがいたる重荷を負るにたとへたる俗語なり云々。 伊勢

(余)此物語にあまたある詞ながら、みな老たる人のわかきにむかひたる家に助語にあまたある詞ながら、みな老たる人のわかきにむかひたる時につかなてあり。然れば、身にと、又尊き人の賤きものにむかひたる時につかひてあり。然れば、身にと、と、なりでは、またある詞ながら、みな老たる人のわかきにむかひたる

訳分相応ニ。ネンゴロニ。シンセツニ。

き思ひ」といふ題にて歌ども有。みなその意也。 一丁才(^{爾刻四六ページ)} 「新似る物無てふ語也。六帖「似な

沖・真淵もいひたれど、いかにあらん云々。下略外にもあまた見えたる詞なり云々。是を「似なきものといへる也」と契外にもあまた見えたる詞なり云々。是を「似なきものといへる也」と見え、其余無二といへる文字は、史記韓信伝に「功無」二二於天下」と見え、其

言の本はいかなる意かしらず。ただたぐひもなくといふやうの意につか国無二の意とするは、ひがこと也。又無似の意とするもよろしからず。

ひたり。

はいかがなるべし。銀なほ似なきといふかたなるべし。似もじは体言にいへるなり。無二

雅訳ムルヰヂャ。

○帚木巻語釈

すき事 同(翻刻八ページ) [新]是は古語にはあらで、中ッ世よりいふ俗語ていふ意也。しきは例の形容辞なり。俗言に仰山にといふにあたれり。 ことごとしう 一丁オ(翻刻八ページ) (釈)事々繁にて、其事をとりたて

にて、風流或は洒灑或は好色などの事をいふ也。 すき事 同 (翻刻八ページ) [新]是は古語にはあらで、中ッ世よりいふ俗話

歌「すきこのむ」などの意の「すき」にて、人の心に深く欲する事を歌「すきこのむ」などの意の「すき」にて、人の心に深く欲する事なれば也。さて、それより又転りては、あだあだしきかたかく欲する事なれば也。さて、それより又転りては、あだあだしきかたが、より出て、好色の事に転しいへり。さるは、好色の事は人の心にふ歌「すきこのむ」などの意の「すき」にて、人の心に深く欲する事を

まめだち同(翻刻八ページ)| 湖| 実目つくる事也。

「だち」は「めき」といふに同じく、其有様をいふ詞也。 |新||真|||也。日本紀に「忠誠」また「忠」一字をも訓たり。ここは実目の意也

づかる事にはあらず。
「まめやか」「まめまめし」などいひて、心にまこと有を云。目にあ

釈余釈よろし。実目といふは何の意とも聞えず。

訳シンジッメキ。

雅訳トクジツニモチコム。

なよびか 同 (翻刻八ページ) **新**なよ竹といふがごとく、しなえたわむ

は妄也。且ひを清べしといへるも誤也。 の字をなよびかと訓といふ説これも「なまめく」てふに同じき辞也。 麗の字をなよびかと訓といふ説よびゆき」などいふ。転じては、なまめく事ともす。 びはぶりの反にて、類の語にて、此文に「なよなよ」といひ、又とかく「なびき来て」「な

又「なまめく」と同じやうにいはれたるも、言の本たがへり。釈此説大かたよろしきを、「びはぶりの反」といはれたるはいかが也。

訳 ヤンハリ。シナヤカナ。イロメカシ。

らず。 らず。 「同(翻刻八ページ)(釈)「まかで」は罷出の約れる也。すべて罷 まかで」同(翻刻八ページ)(釈)「まかで」は罷出の約れる也。すべて罷 まかで」同(翻刻八ページ)(釈)「まかで」は罷出の約れる也。すべて罷

さて、さぞ、さこそ、さばれ、さやう、の類いづれも然り。 は、さは、 さにて、上をうけて下を起す処に必用ふ詞なり。されば、さるは、さは、 まででいふ辞也。 しは例の助辞にて、勢ひを強むるばかりにて意はな事を受ていふ辞也。 しは例の助辞にて、勢ひを強むるばかりにて意はな事を受ている辞也。 しは例の助辞にて、勢りを強むるばかりにて意はな事を受ている辞也。 しは例の助辞にて、 対したる語にて、上にいへるさし、 さぞ、 さそ、 さぞ、 さこそ、 さばれ、 さやう、 の類いづれも然り。

仇讐を「あた」といふとはいたく異也。混ふべからす。
 位。あだあだし、あだけたり、あだ人、あだ物、などいふ類みな同じ砂心ばへ也。俗言にウハキといふにあたれり。めきは例の形容をいる葉集に花といふ字をあだと訓たるも、花のうつろひ散やすき意をとれる葉集に花といふ字をあだと訓たるも、花のうつろひ散やすき意をとれる葉集に花といふ字をあだと訓たるも、花のうつろひ散やすき意をとれる葉集に花といふ字をあだと訓たるも、花のうつろひ散やすき意にて、万あだめき。

めなれ 同(翻刻八ページ)(釈)目に馴たる意にて、見馴といふに同じ。

と解れたるは、いたく違へり。新釈に、「さしあたりて好色めき、めなれゆくべき女をばしたひ給はず」だめきたるすきずきしさは、常に見馴たる事にてめづらしからぬ意也。この「めなれたる」は、「すきずきしさ」へ係る意にて、うちつけにあ

あふをも云。 に従はぬをいへり。又転りては俗言にいふと同じく、物事のをりにさしに従はぬをいへり。又転りては俗言にいふと同じく、物事の我心の思ふニクヤと訓り。物事の我心に従はぬを憎みていふを本にて、我心の思ふ歎息の声、「にく」は憎き意也。杜律・遊仙窟などに、生憎の字をアヤッチをは、しているに同じくある。

雅訳メイヨニイヂワルウ。

久しく来給はぬをまちどほにおぼせる也。 ころもとなく」などいふ言、特遠なる意に多くいへり。ここも源氏君の おぼつかなく 二丁ウ(翻刻1○ページ)国すべて「おぼつかなく」又「こ

ば、今も改めず。因におどろかしおくのみ也。聞えたれば、ほを清てよむべきにや。されど、久しく濁り来れる言なれ歌案に、かやうのおほといふ言は、皆おほらかにとりしまりなき意と

いふも、頭中将をなり。とれば「いたはりかしづき給ふ」とみかは通ひすむ所といふことなり。されば「いたはりかしづき給ふ」と也。頭中将のすみか也。男の女の許へかよふを「すむ」といひて、此すすみか」同(翻刻1○ページ)国たみ詞に四君のすみかといへるは、俗意すみか

く」は物憂の意にて、何といふ事もなく物事につけて憂く思ふよし也。るもあり。されどいひもてゆけば、さる意に聞ゆるなり。さて「ものう事につけて」といふ意なるを、後にはただかろく発語にそへたるやうなものうく 同 (翻刻一○ページ) (釈)すべて「もの某」とつづく物は「物

ひ給ふよし也。り。ここもその意にて、四君の方へかよひすむ事を頭中将のタイギニ思り。ここもその意にて、四君の方へかよひすむ事を頭中将のタイギニ思されば、転りては懶惰の字にあたりて、俗言にタイギナといふ方になれ

雅訳」ココロガススマヌ。イヤキナ。

をさをさ 三丁オ (翻刻 □ページ) [拾]万葉集十四東歌に「とやの野にをさぎねらはりをさをさもねなへこゆゑにははにころばえ」、此歌をさをさどひ給はざりけり」。又やがて此下に「殿上にもをさをさ人ずくの君にしのびてねたまひそめてけり。ときどきおはしまして後、此宮をの君にしのびてねたまひそめてけり。ときどきおはしまして後、此宮をの君にしめなどを引合せて、いづれにもわたりてかよはせば、「大かた」といふに似たり。

新長々の意にて、専らとする事也云々。

○ しことにて、殿上にもあまり人もないといふ意也。
 ○ しことにて、殿上にもあまり人もないといふ意也。
 ○ しつめてたしかに立おくれずとにはあいへる、よくあたれり。ここもさしつめてたしかに立おくれずとにはあらず、大体おとらぬ意也。されば俗言に「あまり」といふ言、これによらず、大体おとらぬ意也。されば俗言に「あまり」といふに似たり」といはず、大かたに定めていふ詞也。拾遺に「大かたといふに似たり」といはず、大かたに定めている詞也。拾遺に「大かたといふに似たり」といるされている。

敬しうやまふ也。応神紀「謹惶」。夕顔巻に「又なき事にかしこまる」がしてまりさは、あり。一ッには、勘当の心。須磨巻に「源氏の光る君こそおほ種の義あり。一ッには、勘当の心。須磨巻に「源氏の光る君こそおほ種の義あり。一ッには、勘当の心。須磨巻に「源氏の光る君こそおほ種の義あり。一ッには、勘当の心。須磨巻に「源氏の光る君こそおほ

つかしげに侍れど、かしこまりをだにとてなん」。石紫巻に「いとむに「さすがにかたじけなうおぼえしかしこまりに」。若紫巻に「いとむとひまかりすぎしかしこまりなど申す」。五ッには、謝する事。竹川巻とひまかりすぎしかしこまりなど申す」。五ッには、謝する事。竹川巻とひまかりすぎしかしこまり申す」。四ッには、又「らうがはしき大路にたちおはしましてとかしこまり申す」。四ッには、

心にいへり。見るべし。余滴にもいへれど、委しからず。さてここは、敬礼をなさぬ別なほ例ども多くひきたりしを、今はいたくつづめてとりつ。本書を

があらん。ここはただ「ひまさうにふりくらして」といふ意のみなり。一般新釈の一本には此説なし。さて「つらねつらね」と解れたるはいか也。良禰の約、礼なれば、『つれづれ』といへり。さてつらねつらね物也。良禰の約、礼なれば、『つれづれ』といへり。さてつらねつらね物で、良禰の約、礼なれば、『つれづれ』といへり。さてつらねつらねやいふこと

は。 雨などふりて物のぬれしをるるかたより転じて、しめりやかなるをいふ「しづかなる」といふべし。すべて「しめやかに物がたりして」などいふも、「しづかなる」といふべし。すべて「しめやかに物がたりして」などいふも、し。

るは、時節なり。シッポリと訳するは、ことわざ也。 [雅訳]シットリと訳するは、人の有様也。ヒッソリ、又シンシンと訳す

なりぬらん今はおとやに霜のふるらん。、かたはなる名のおとやにも聞かたは 同ウ (離刻二ページ) (紹注頭、片輪。今按、先かたわと書る仮字誤りて、注もこれにしたがひて誤れり。鳥の片羽よりいふ詞なれば、字誤りで、注もこれにしたがひて誤れり。鳥の片羽よりいふ詞なれば、字談のはいいのはらにやどるは、時節なり。シッポリと訳するは、ことわざ也。

羽の今はおとやのかたはにはせん。ゆるは思ひいらるるころにもあるかな。、秋の夜の数をかかせんしぎの

又、広く惣じてといふやうにもいへる事あり。 おしなべたる 同(翻刻二ページ)釈「押」は、例のつよめたる発語にて、まべてなみなみの事にてすぐれぬ意に転していへり。意なし。「なべ」は、並べたる意也。物を並べてまさりおとりなく同じほ河海に「頑」「片輪」とある、共にひがことなり。拾遺の説のごとし。

山よりおのがじしふくにちりぬるもみぢかなしな輔相。
のがじしとぞねはなかれける。拾遺・物名・四十九日、「秋風によものぬ人にしられず。貫之家集に、「おく露のこころやわくる菊の花うつろぬ人にしられず。貫之家集に、「おく露のこころやわくる菊の花うつろいだしとでねはなかれける。拾遺・物名・四十九日、「秋風によもののがじしとでねばなかれける。拾遺・物名・四十九日、「秋風によもの中におりおのがじしふくにちりぬるもみぢかなしな輔相。

じな」てふほどの意也。「「新万葉に各が寺師と書たれば、上のしは濁るべし。さて「おのがしな」

づかひのみだりがはしくなれるより、かかるたぐひおほし。 あ」をも「おほ」と書なしたるなるべし。音便にいふこと多く、又仮字をとは「あふさわ」なりけんを、例の音便に「ざう」といひ、つひに「あま此言は、万葉に「あふさわ」といふ言ある、それと意同じく聞ゆれば、

|余||関屋巻に、「御心のうちいとあはれにおぼしいづることおほかれど、

おほざうにてかひなし」。柏木巻に、女三宮の御子うみ給へる所に、「ちのおとどなど心ことにつかうまつり給ふべきに、此ころは何事もおぼちのおとどなど心ことにつかうまつり給ふべきに、此ころは何事もおぼされで、おほざうの御とふらひのみぞ有ける」。ウルサクテハブキッ。蜻蛉日記に、「こちといへばおほざうなりし風にいかでつけてはとけんあたらなたてに」。これは大空の誤なるべきか。これらをよみあぢはひてみれば、おほざうの心、おのづからしらるること也。須磨巻に、「かんの君は云々かをりある女御・みやす所にもおはせず、おほやけざまのみやづかへとおぼしなせり」と有。「おほやけざま」といへる詞、「おほざう」とよくかなへり。今の俗の「おもてむき」といへるによくあたれり。新釈にいかなへり。今の俗の「おもてむき」といへるによくあたれり。新釈にいかなへり。今の俗の「おもてむき」といへるによくあたれり。新釈にいたる「おほぞら」といへるは強ごと也。よるべからず。宣長が説に、万葉巻八に「さをしかの萩にぬきおける露のしら玉相佐和にたれの人かも葉巻八に「さをしかの萩にぬきおける露のしら玉相佐和にたれの人かも葉巻八に「さをしかの萩にぬきおける露のしら玉相佐和に、「ちれていり。此詞よく考へ出たれば、よるべくこそ。

釈此語の本の義、詳ならず。解れたる説どもはここに挙るがごとくないへるはいかにぞや。よし新釈はしひ言にもあれ、小櫛の「あふさわ」とおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやしき意とは聞ゆる也。さればことのすぢもいたくたがへるに、仮字も「あるを、余滴に「よく考へ出たり」といひ言、あまりに物遠き考めきたり。然る」を「おほ」とは誤るべくもあらず。あまりに物遠き考めきたり。然るを、余滴に「よく考へ出たり」といひて、なかなかに新釈をしひ言といへるはいかにぞや。よし新釈はしひ言にもあれ、小櫛の「あふさわ」とおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやとおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやしるやう也。おほらかなるといって、なかなかに新釈をしひ言といへるはいかにぞや。よし新釈はしひ言にもあれ、小櫛の「あふさわ」とおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやとおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやとおのがいる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやとおのがいへる「おもてむき」とは、いたくかけはなれたる語ならずやとおのがいかに、からは、対しないというに、ないないでは、からは、いっとは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというは、いっというにない。

一のまち 四丁オ(爾刻二三ページ) 「おほやけざま」は、桐壺巻に「くらづかさこくさうゐんなど、おほやけだとにつかうまつれる、おろかなる事もこそと云々」とあるおほやけけごとにつかうまつれる、おろかなる事もこそと云々」とあるおほやけだとにつかうまつれる、おろかなる事もこそと云々」とあるおほやけずまり「かいなで」などいふ義と聞ゆ。雅語訳解にヒトトホリ・表ムキ・とりしまらぬ意とは聞えたれど、「ざう」の意はしられがたし。意は「なともの中にしか聞ゆるやうなるもあれど、それも皆ヒトトホリ・表ムキ・どもの中にしか聞ゆるやうなるもあれど、それも皆ヒトトホリの意也。かへすがへすいぶかし。又「おほやけざま」とかなへりといへるもいかがかへすがへすいぶかし。又「おほやけざま」とかなへりといへるもいかが

歌これを俗語といはれたる、いとよろし。「まち」は、和名抄に「坊声れにつぐもののをりなどする意にていふ俗語なり。

訳二ノキリ。

はりあり。 「こめく」など、皆おほやうなる意にして、其内におのおのいささかか「こめく」など、皆おほやうなる意にして、其内におのおのいささかか「こめく」など、皆おほやうなる意にして、其内におのおのいささかか「こめく」など、皆おほやうなる意にして、其内におのおのいささかか」である。

余とりしまらぬさま也。わかき人のあどなきをいへり。花宴巻に「お

ろは、頬咲なるべし。口をひらき歯もとをあらはさで、しのびてわらふ

ほどき過て」。ほどけたる声」、狭衣に「としははたちにぞなり給ひけれど、いたくお

さみとなる。「なぐさみ」は、心の愁などを和す進なり。さみのやうなる中にも也。「すさみ」は進にて、心に進み来る故になぐす。「なべる中にも也。」「すさみ」は進にて、心に進み来る故になぐす。「なべ」「ない

ほほゑみ同(翻刻一四ページ)「余型沖云、「ほほゑむといふ和語のここ ある人をやさしきといふは、向ひてまみえんも心づかひせられてはづか ちゑみたるも、はづかしげなり」。これらにてしるべし。その人の徳に 清少納言に「かぢすこしして、『いかにさわやかになり給へりや』とう 僧都のはづかしげなるに、かくまで見ゆべきことかは、と思ひかへして」。 ほほゑみ給へる、はづかしげ也」。夢浮橋に「なみだぐまれぬるを、猶 書の中に見えたるは、初音巻に「かきまぜつつ有を、とりて見給ひつつ りかけるは、ことたらず。此「はづかしげ」をよく解得たる人なし。此 はづかしげ同(翻刻一四ページ)。全この注に「頭中将の体也」とばか ひにもあれ、とるべきふしのあるを「ゆゑ有」とも「よしあり」とも云り べき也。「ゆゑ」といふ事も、此物語などにてはかならずしも故の字・ どにてはかなはぬ事多し。ただ此物語は此物語のころのやうをもてとく なはず。すべて万葉などのふるき意をもて言の本をとけるは、此物語な るは、わろし云々。又「ゆゑ」といふことをもむつかしく説たれど、か ゆゑづけて同(翻刻一四ページ)」玉たみ詞に「ゆゑづきて」と改めた かたはらの人の恥るなり。古今俳諧「何をして身のいたづらになりぬら 由の字の意にもあらず。ただ芸能にもあれ、心おきてにもあれ、ふるま しき人といふ心なれば、こなたの心をかなたに名づくる也云々」と有。 ん年の思はんことぞやさしき」。契沖云、「やさしきははづかしき也。心

をふくみて少しゑむこころ也」。
ふむ』。ふほごもり、と応神天皇の御歌にあるふほも是なり。笑ひたきほどに、頬にすこしそのさまの顕れてみゆる心也。又含の字、古語『ふ

いふも、含みの所なれば也云々。含みて有をいふ。その「ふふ」と「ほほ」と音通へり。人の頬をほほと「新含笑也。万葉に「梅花いまだふふめり」といふは、花のまだひらけず、

(いうなり) 同ウ (離刻一四ページ) [雅集]優。 ヤサシクシトヤカナル意也。 形優劣と相対ふ優にて、すぐれたる意也。又ゆたかにやさしき意も有。 形にも芸能にもいへり。天徳歌合、「小臣奏云、左右歌倶 以優也云々」。

人げなき 六丁オ (翻刻一六ページ) (釈)人気無といふ意にて、人がまし

を「けしうはあらず」といふなり。ここも然なり。 てつかふところは必しも貴賤の事にはかぎらず、物のさしもあしからぬからぬ也。賤しきを「あやし」とつねにいへば、即賤しからぬにて、さからぬ也。賤しきを「あやし」とつねにいへば、即賤しからぬにて、あやし

保字治拾遺巻二「『ひはぎありて人ころすや』とおめく。それをききて、このたてる侍ども、『あれからめよや。けしうはあらぬおもとのたけだちかな」。また宇治拾遺巻七「殿、台をひきよせ給ひて、かなまりをとらせ給へるに、さばかり大におはする殿きよせ給ひて、かなまりかなと見ゆる、けしうはあらぬほどなるべし」。の御手に大なるかなまりかなと見ゆる、けしうはあらぬほどなるべし」。の御手に大なるかなまりかなと見ゆる、けしうはあらぬほどなるべし」。でずでなどにてしるべし。「けしうはあらぬよや。また宇治拾遺巻七「殿、台をひなどにてしるべし。「けしうはあらぬ」は、常並にはあらぬといふこと也などにてしるべし。「けしうはあらぬ」といへるも、此詞をつづめいへるなり。万葉に「日にけに」にけしからぬ」といへるも、此詞をつづめいへるなり。万葉に「日にけに」とあり。「けに」とは常の事也。

でちの言なり。まがふべからず。
 でもの言なり。まがふべからず。又余滴に「常並にはあらぬ」といへるやしきが即あやしきにはあらず。又余滴に「常並にはあらぬ」といへるいかが。それは貴き人のいといと賤しきさまを見る時にこそいはめ。い郷小櫛の説のごとくなるべし。但し、賤しきをあやしといはれたるは

かぱらか
八丁オ(翻刻一七ページ) 湖さはやかなる義也。

新」これは、かのなまなまの三位よりも「潤と」異なる意とみゆれば、新」これは、かのなまなまの三位よりも「潤と」異なる意とみゆれば、新りたげなるけはひ、物きよくかはらかに、人のむすめとおぼゆるに「らうたげなるけはひ、物きよくかはらかに、別のおきたるなけなるけるのになれることにも用たるなるべし。俗に「さつぱりとしたり」といふにかよへり。やどり木巻に「ほめつるさうぞくつぱりとしたり」といふにかよへり。やどり木巻に「ほめつるさうぞくで転じては、物のきよらかになれることにも用たるなるべし。俗に「さっぱりとしたり」といふにかよへり。やどり木巻に「ほめつるさうぞく」である。といるは、かのなまなまの三位よりも「潤と」異なる意とみゆれば、新してり。

(釈此語の本の義、詳ならず。余滴にいへる乾く意ならば、仮字やとかの)があらん。新釈の説は、何の事とも聞とりがたし。又案に、もしくいかがあらん。新釈の説は、何の事とも聞とりがたし。又案に、もしくはがらかといふにて、清き意にとれるにや。されど猶決くはいひがたし。対策に、明やとかきてサツハリと訳したるは、同じく乾まれば、明本の義、詳ならず。余滴にいへる乾く意ならば、仮字やとかといかくに、はを濁るはわろし。

らず。古は名をいへることなるに、これは作り物語にて、惟光・良清なかひてかくなにがしといへるは、其時実になにがしといひしよしにはあなにがし。同ウ(翽刻一九ページ)国すべてみづからのことを、人にむ

るたぐひも、その名をいふべきを、かくいへり。うつぼの物語などは作 名をいへるぞかし。 り物語ながら、皆人々の名をも作れる故に、人にむかひていふ所にも皆 なにがしと書る也。なにがしの院、なにがし寺、 どをおきての外は、 すべて人々の名をば作らずして、名をいふべき所を なにがし僧都などいへ

アノ方コノ方ノ心ナリ。 かたがた
十丁オ(翻刻二ページ) |雅集| イロイロサマザマニ。カレコレ。

釈方々の意也。彼方此方につきて云々といふ義也。又桐つぼの巻に、「世 のおぼえ花やかなる御かたがたにも」といへるは、人々といふ意也。 れも、かなたこなたに住給ふ人々といふ意也。

なのめに 同ウ (翻刻ニページ) (釈) 「なのめ」は、昔より斜字を訓来

とは見えながら離たれもせぬを、さて保るるといへるなり。 かかはりてとりはなたぬ事に転しいへり。ここは、男の思ふにかなはぬ たもたるる同(翻刻二三ページ)(駅)「たもつ」は手持の意を本にて、 るまじき」にて、ゆがみなりにすておかるまじき後見の方といへるなり。 たれり。又この下に、「ことが中になのめなるまじき」とあるも「斜な ゆるしおかるべき人といふ意にて、俗言にユガミナリニといふに全くあ りたるごとく、直からずゆがみたる意也。さてここは、斜ながらにさて

訳ザワザワト。

クユカシイといふにあたれり。 あらで、ゆかしき事を反うへに憎しといへる也。今俗の意にも、心きき しと同じ。さて、「こころにくし」は心のゆかしくおもはるるにて、オ てめでたき物などを見て、ニクイ物ヂヤ、ニクラシイ形ヂヤなどいふ僧 心にくく
同(翻刻三ページ)(釈)心憎く也。この憎くは実に憎むには

かれは黒しといふやうに、たしかにけぢめのあるをいふ。その文のなき あやなき 十三丁ウ(翻刻三五ページ)釈文無なり。「あや」は、これは白し、

は、けぢめなくすぢのたらぬ義なり。

雅訳ワケガタタス。ムチヤジヤ。

あわつかに十四丁オ(翻刻一六ページ)。「弄」あはあはしくいひて、 さし

|余||契沖云、「さしあふぎゐたらんといふは、何ともせぬ意也」。 真淵云、「心 たらぬものは空を仰ぎてゐるもの也」。

「あわたたし」などいふ、皆此類の語なり。いづれもわと書べし。 わつけし」といふもまた活かしたるにて、意は同じ。此外「あわあわし」 て」も同じ辞にて、意はいはれたるやうに、しみやかならぬさま也。「あ もやと書つ。かは例の形容の辞也。「あわてふためき」などいふ「あか 按に、新撰字鏡に惶急を阿和豆と訓り。これなるべし。かれ今は、仮字 たるは、いかが。「淡々し」とはいかなるさまとかせん、いと心得がたし。 **|釈右の説どもに、「あわ」を「淡」と見て、仮字さへ「あは」とかかれ 玉**河海に「淡々しき也」と有。俗にいふ、しみやかならぬなり。

ゑかにわりなき所つい給へり。あまりうしろめたげなる云々」。これを り見ぐるしきまでこめき給へり。はらぎたなき人、あしさまにもてなし はおもひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あま きをいふ。紫式部日記に小少将の君の事を、「心ばへなども、わが心と こめきて いひ告る人あらば、やがてそれに思ひいりて、身をうしなひつべく、あ いとわかき女子めきたるてふことを知べし云々。 同(翻刻二六ページ))新よにも人のむすめ子めきて物はかな

詞也。親はよろづに子のあつかひをするを、子は親にしたがひて親のす 詞に「むすめの子めきて也」といへる、よろし。「親めく」に対ひたる **|玉||おほやうなるをいふ。花鳥に「をさながましき心也」と見え、たみ**

るままに大やうにてある意也。

だ児めきて也。「ここし」「こめかし」などいふこも児の意也。 (釈)此説どものごとし。但し、むすめの子とかぎられたるはいかが。 た

雅訳」「ここし」は「子々し」なるべし。大ボコナ。大ヤウナ。

意也。皆俗にいふとは少しことなり。注に「男に引つくろはるるほどの 女なればなり」といへるは、俗にいふ意に見たるにや。 とあるを、 こころもとなく同(翻訳二六ページ)「玉」すべて此詞は、物のあかぬこ かくあれかしと願ふやうの意也。おそきを待ことにいふも其

かくれがくれまでいたれる物いひ也。 くまなき 同ウ (翻刻ニセページ) [新]物の隠れたる所を限といふ。さる

ねぢけがましき 同(翻刻二八ページ) 「新」「ねぢけ」は、万葉に侫人を よみたれど、ここはかの侫人といふまでにことごとしくはあらず。

侫字につきていへるにて、ひがこと也。 形にもあれ、しわざにもあれ、有べきままに直からずして、わろくまが、国此の詞、巻々所々に見えたるを、合せて考ふるに、人の、心にもあれ、 にて、意も通へり。注に「口ききがましき人をいふ」といへるは、 れる意也。俗言に、物のまがれるを「ねぢれたり」といふと、もと同言 ただ

のてがしはのふたおもにかにもかくにもねぢけ人のとも」。六帖に「と にもかくにもねぢけびとかな」。 **|余||横笛巻に「いとねぢけたるいろごのみかな」。万葉十六「なら山のこ**

ともいひては、 「処女墓、中爾造置、壮士墓、此方彼方二、造置有、故縁聞而、雖不知、東トメッカ、ナカニックリオキョトコッカ、コナタカナタニ、ックリオケル、ユヨシキキテ、シラネドモウえよし、同(翻刻二八ページ)拾万葉第九、見「菟原処女墓」歌の終に、 一義と見ゆれば、今の「ゆゑよし」も、あまりのゆゑともあまりのよし 文章もわろく、 ことわりも聞えねば、さてかくはいへる

> なるべし。「よろこびに思ひ」は、俗にいふひろひものの心也。 |玉| 「ゆゑよし」の事、上にもいへるごとく、何わざにもあれ、

とるべきふしあるを、「ゆゑ有」とも「よし有」ともいふ也。

みさをつくり
十五丁オ(翻刻二八ページ)「新」「みさを」は「真青」にて、

といふは、万葉にあり。 松柏などの常に青きより、人の心のかはらぬにたとへいふ。 青を「さを」 |玉| 「みさをにもてつけて」ともいへり。くづれぬやうに心をつけても

「常住不断にもてつけて也」としるせり。されば、しらずがほつくるも、 也云々」。此末に「みさをにもてつけて、みなるるままに」といへる注に **|余| 「みさを」とは、東野州聞書に云、「みさをとは、常の義かはらぬ体** てつくるなり。

くる事なるべし。訳ヘイキメカス。 なる君」とよめり。松柏にたとへたるは、「松のみさを」などいひなら (釈)「みさを」の言の本は、新釈の如くなるべし。万葉に「人魂のさを かへぬを、松柏の色かへぬにたとへたる也。「つくり」は、げにもてつ へるにて著し。さて、いと後には女の貞操の事にいへるも、立たる志を つねの顔色をかへぬより「みさをつくる」とはいふなるべし云々。

|雅訳| 「みさを」は、行儀ダテ。「みさをつくる」は、キット守ッテヰル ジットシテ、シランカホデ、ヘイキデ。

也。「び」は「ぶり」の反にて、そのさまをいふ辞なり。 ことさらび 同ウ (翻刻二九ページ) [新]わざと為出たるがごとしといふ

せしに、いとど参りたぢろぎすみ給ひし家などの、あとかたもなくなり」。 たしもはてでふみ見るは」。浜松中納言物語に、「つくしへはなたれおは の橋なればけふさへたえてたぢろぎにけり」。著聞集に、「たぢろぐかわ たぢろぎ 十七丁オ(翻刻三ページ)全堀川百首、「朝夕につたふ坂田

雅訳」ドサメキ。「たぢろぐ」は、グラヅク。

忍ぶべうもあらねば」。和名抄に、「説文云、疼徒冬反、訓比々良久、動きなど、いと心づきず。切焼がごとくうづきひびらぎ、身ほとほりて堪はいたれる也。されば此事かの事といひ挙る意にてふしといへり。出るにいたれる也。されば此事かの事といひ挙る意にてふしといへり。出るにいたれる也。されば此事かの事といひ挙る意にてふしといへり。に云、「かぎをとらせ給へれど、うちとにしかじかとかためたれば、たちゐひびらぎて云々」。紫日記に、「ふやのはかせさかしだち、さひらぎあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやあたり」とある「さひらぎ」も、「ひびらぎ」の「ひ」を「さ」とあやまれるなるべし。同所に「おこなひがちにくちひびらかし、ずずの音にあるなび、いと心づきなくみゆるわざなり」。発心集四、「此病の苦痛にかきなど、いと心づきなくみゆるわざなり」。発心集四、「此病の苦痛にかきなど、いと心づきなくみゆるわざなり」。発心集四、「此病の苦痛にからないっぱいない。

雅訳口を動かすなり。クチタタク。

痛也」とあり。今も身をさまざまにうごかすをいへるなるべし。

右の例ども、皆響く意として聞ゆ。(釈案に、「ひび」は響の「ひび」と同じく、「らぎ」は例の形容の辞なるべし。

てこもしかり。 饗を「あへ」といひ侍るより出て、みな人をもてなす方の語となりぬ。 あへしらひ 同 (翻刻三三ページ) [新]日本紀に待字を訓たり。語の本は

にこそ有けれ」。これらの「そば」也。器などのありふれたるを其ままべをこそ見給へ」。梅枝巻に、「此頃の人は、ただかたそばをけしきばむに、「めをしつとつけ給へれば、おのづからそばめに見ゆ」。同巻に、「見を 間 (翻刻三四ページ) [余]河海に側付と有によるべし。空蝉巻

(射比説まいかがあらん。本文こ挙とる玉小節を导とりとすべし。新沢かたよりたるさま也。「そば」は「かど」といへるにもかよへり。にはつくらで、そのかたそばをのみとりてただしからずつくり出すを云。

に万葉の伊蘇婆比を引れたるは、さらにかなはず。 釈此説はいかがあらん。本文に挙たる玉小櫛を得たりとすべし。新釈

白く軽薄なる筋をいふ。されどいふ。さて俗にもしやれたる物といふは実様には違ひて、一旦面ざれといふ。さて俗にもしやれたる物といふは実様には違ひて、一旦面をればみ。同(離別三四ページ)[新]洒灑めきたる也。洒灑洒落なる事を

「あざける」「字」の類と同じ言ならんと鈴木氏いへり。(余按ずるに、洒灑の音にあらず、「あざれ」を略せる語也。「あざわらふ」

き追風に真帆にかくる心によせていふ詞勲云々。 にて、「かたほ」はそばむきなる追風にかたほにかけ、「まほ」はただしいふに対する詞なり。これに准ふるに、「かたほ」と「まほ」とも対せる詞なれば云々。「こぐ船のまほにも」とつづけたるによらば片帆真帆る前なれば云々。「こぐ船のまほにも」とつづけたるによらば片帆真帆をかきて「まて」とよめるは真手にて、いづれにても一手を片手と手」とかきて「まて」とよめるは真手にて、いづれにても一手を片手と手」とかきは風に真帆にかくる心によせていふ詞勲云々。

たるかとも思へど、然にはあらじ。本の意は別に有べし。「かたほ」はろくにもあらぬ事也。さて言の本は、船の真帆片帆より出国「まほ」と「かたほ」と反対したる詞にて、「まほ」は物のろくなること

にもをりをり有。新釈に「真顔也」と有はひがこと也。釈なほ船の真帆片帆より出たるなるべし。船のわざにていふ語、今時

(釈さまざまの女にあひて、その思ひとまりにといふこころ也。あるや。あやしきものにとまるとは』などやすからずきこえける云々」。あるや。あやしきものにとまるとは』などやすからずきこえける云々」。からでのみのはてはかくぞとまり 同(研列三七ページ)(余)うつぼ物語俊蔭巻に、「『いやしきものを

おいらか同ウ(翻刻三七ページ)「余契沖云、「老らかなるべし。此物語

なだらか、などの「らか」にて心得べし。考るに、契説に従ふべし。「らか」は、あきらか、きよらか、あららか、所多し。於以と書て於比とかかず、老らかの心を用べし」といへり。今にあまたある所、老らかにてはかなひ、ねびれたるの推にてはかなはぬ

釈面を俯てはづる意也。

おぞまし 同ウ (翻刻三九ページ) (金)浮船巻に、「こめきおほどかにたをたをとみゆれど、けたかう世の有さまをもしるかたすくなくておふしたてたる人にしあれば、すこしおぞかるべき事を思ひよるなりけんかし」。におぞき人にて云々」。夕霧巻に、「人ぎきもうたておぞましかるべきわにおぞき人にて云々」。夕霧巻に、「人ぎきもうたておぞましかるべきわおどろおどろしくおぞきやうなり」。源平盛衰記三十五、「内田三郎家吉おどろおどろしくおぞきやうなり」。源平盛衰記三十五、「内田三郎家吉おどろおどろしくおぞきやうなり」。源平盛衰記三十五、「内田三郎家吉おどろおどろしくおぞきやうなり」。源平盛衰記三十五、「内田三郎家吉おどろおどろしくおぞきやうなり」。源平盛衰記三十五、「内田三郎家吉と名乗て進けり。巴は、一陣に進むには剛者、大将軍にあらずとも、物具の毛の面白きに、押並びて、しやくびねぢ切て軍神に祭らむと思ひけるこそおぞかりけれ」、印本「遅かりけれ」と有は誤也。 古語拾遺注云、「古るこそおぞかりけれ」、「おぞまし」は女のこころのををしうたけだけしき事にいへる也。物語にかける、古語拾遺の注にみえたる如くみな女の上にてのみいへり。

どもはら行はれし時なれば、詩語をつねにいひならひたるか。しるべかどみな同語にて、「いひそし」は言過ならんか。されど此頃白氏文集な約りたるにて、すごしといへる詞ならんか。「ゑひそし」「しひそし」ないひそし 二十三丁オ (翻刻四〇ページ) [余]「いひそし」のそはスコのいひそし

.) <u>"</u>

そと同し意かともおもへど、猶定めがたし。 だ事をつよくいふ一つの語としてあるべし。もしくは「そしる」などのぶべき事あらず。さればいづれもひがこと也。言の本はしられねど、たむといふことは例なき事なり。又愁殺などの殺は音サイなれば、そとい歌いひすごしの意ならば「いひすごし」といふべし。かく短き言を約

と云也。と云也。 同(離別四〇ページ)(釈敬無憑といふ言の訛れる也。「敢なし」は、俗にはりあひなしといふ意也。さていかならんともしりがたなし」は、俗にはりあひなしといふ意也。さていかならんともしりがた

を小指の事とせるは誤れり。 および 同ウ (爾刻四○ページ) [余契沖云、「和名抄、指和名由比、俗云 および を小指の事とせるは誤れり。 「けふいくかはつかみそかとかぞ が与比。儀礼云、季指和名古於与比、小指第五指也。これ指を惣ておよ が与此。儀礼云、季指和名古於与比、小指第五指也。これ指を惣ておよ

の花」と有。和名抄に「俗云」とあれど、さにはあらじ。(釈)万葉五に、「秋の野にさきたる花をおよびをりかきかぞふれば七くさ

れて女のかたがたへありく也。を延て「あくがれ」といふ。しかればここは、只例のここかしことうかを延て「あくがれ」といふ。しかればここは、只例のここかしことうかれ」

は浮といふ語のはたらきたるにて、漂ふ意也。「あくがれ」とは別也。し。在所を離て他へゆく意也。か・く・こ共に通ひて所の意也。「うかれ」れば、従ひがたし。此語は荒木田久老の説に「在所離」といへる、よろ釈此説いはれたるやうなれど、かく発語より反むることは例なき事な

あがるる 同(翻刻四二ページ) | 余||後撰雑二、「太政大臣の、左大将にて

かれまかりあがれけるに」。 すまひのかへりあるじし侍りける日、中将にてまかりて事をはりてこれ

釈頒字を「あがつ」とよむ、「あが」と同じ意にて、分散する意なり。 さうじみ二十五 丁オ(翻刻四三ページ)[新]正身二字をいふ。「しん」を「し

皆須ト検アー点正身、、然後奏聞ム」、三代実録巻十三、「応天門云々、有」失 ||余古事記に、「其神之正身」とあり。令義解巻五、「凡兵衛衛士上番衛士 火事 云々、或人告言之大納言伴宿禰善男可所為奈利。驚怪比賜此天、令 み」と云は、 燈心を「とうしみ」といふがごとし。

爾夫君、更娶」他妻,、正身不」来、徒贈」裏物」。因」此、娘子作」此恨歌」 とは、今の俗語に本人当人などいへると同じ。 還¬酬之」也」。 落くぼ物語・藤原の君の巻に所々に見えたり。 「さうじみ」 万葉巻十六「味飯乎水爾醸成云々。昔有「娘子」也。相「別其夫」、望恋経」年。 所司勘定,爾、正身固争天不;承伏,止云止毛、子并従者等乎栲訊須留爾云々」。

釈この説共のごとし。

ひたやごもり同ウ(翻刻四三ページ))河直隠。

ちいでて見よ」 |細||和泉式部「うきによりひたやごもりとおもへどもあふみのうみはう

などいふに同じ。ここはひたすらに打こもりてといふなるを、かく一向 たるは、あしからず。直もひたすらてふ意に用いる也云々。 に情なき意に転じていへり。或抄に直隠の字をあて、和泉式部が歌を引 |新|「ひたや」は、日本紀に永字「ひたすら」と訓じ、後に一向を「ひたすら」

隠る意なるべし。 釈この注は玉小櫛よろし。新釈もいたくはたがはず。ひたすらに屋に

河海にも同じ。

青表紙は「うるさく」と有しとぞ。

湖月抄に 二十六丁ウ (翻刻四五ページ) [余]河内本には「うるせく」と

> るせくおぼゆるなり」云々。 りにけり」。著聞集九、「頼義を身をはなたでもたりけるが、きはめてう たのうるせかりし物を」。若菜下、「宮の御ことの音は、いとうるせくな 巻に、「故大納言、なにのをりにもなきにつけて云々、いふかひあるか ぞしける」。按ずるに、うるはしきとしたるをいへる詞なるべし。鈴虫 やつぞかし云々。わらはなれども、 にうるせき女ありけり」。同巻に、「このわらはも心えてけり。うるせき も「うるさく」とせしはわろし。うつぼ物語初秋上、「あるじのおとど 仁寿殿はうるせき人にこそ有けれ」。宇治拾遺十四、「北おもてのざうし かしこくうるせきものはかかる事を

はあたらず。言の本はしられがたし。 功者にかしこき意也。余滴にうるはしき意のやうにいへる

じて』といひつかはして侍ければ」。 ひける時、ふむ月の四五日ばかり、『なぬかの日のれうにさうぞくてう る」。後撰秋の上閑院右京大夫宗平女詞書に、「源昇朝臣、時々まかりかよ る○あふことはたなばたつめにひとしくてたちぬふかたはあえずぞ有け ね集に、「ひさにこぬ人をまつにやあえぬらんときはの恋と我はなりぬ えて、「あえもこそすれ」とあれば、古今はあやまりなるべくや。みつ あれど、今本は「待もこそすれ」と有。これは六帖巻一に七夕の歌にみ あえ 同(翻刻四六ページ) |余||契沖云、「仁徳紀に、『誉田に肖給ひぬ』。 こそすれ、素性法師』」。按ずるに、契沖の古今集を引れしは、秋上には 古今集秋上、『こよひこん人にはあはじたなばたの久しきほどにあえも

と云は過たり。只よきぬ也。 書たり。ここは只そのゆく道のほどにある家を云。或説に「よきがたき」 よきぬ 二十八丁ウ (翻刻四八ページ) |新| 万葉に、よき道といふを曲道と

|金||万葉巻七、「みわのさきあらいそもみえず波たちぬいづこよりゆかん

敏行、「住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん」。 よきぬ道とは通り道といふ詞也。万葉十一、「をかざきのたみたる道を 今に、「花のあたりをよきてふけ」。万葉の、よき道を曲道と書りしかば 神もたちはよりけれ」。契沖云、「『よき』は『よけ』といふに同じ」。古 よき道はなしに」。六帖巻三、「わすれ川よく道なしと聞てこそいとふの 人なかよひそありつつも君がきまさんよき道にせん」。古今集恋二藤原

一般「通り道といふ詞也」といへるはわろし。よけず通る道などこそいはめ つづしり 二十九丁オ (翻刻四八ページ) [新] 嘰の字を「つづしり」と訓 くひきりくひきりてうたふ也。きとさだかにうたふべきをり

にあらねば也。万葉に「かたしほをとりつづしろひ」と有。

りゑみは』ととがめあへり。『あらず。さむきしもあさに、かいねりこ 花の色のごと、みかさの山のをとめはすてて』とうたひすさびて出給ひ しるほどに」。 が段に「官人ども物ほしきままにいそぎて、此鮭鯛しほからなどをつづ へば云々」。俗にひと口うたといふものにや云々。今昔物語越前守為盛 のめるはなの色あひやみえつらん。御つづしり歌のいとをかしき』とい ぬるを、猶命婦はいとをかしと思ふ。心しらぬ人々は、『なぞ、御ひと |余||末摘花巻に、「御つづしり歌のいとをかしき」。同巻、「『ただうめの

といひ、それを補ふを「つづる」といふ「つづ」に同じ言也。 (釈案に、きれぎれにうたふよしなるべし。 衣の破れたるを「つづれ

思ふ事にいへり。たとへば人の我にむかひて、 み分たる跡もなし」といはるるをくちをしとおもふが、ねたく思ふなり て、その時にあたりてそをくちをしなど思ふやうの意にて、ここも「ふ べてつねにいふごとく、妬忌む意にはあらず。 ねたます。同ウ(翻刻四九ページ) [玉物語に「ねたし」といふ言は、す ただ時にのぞみてかろく いふ事する事などにふれ

さて「ねたます」とは、さやうにねたく思はするをいふ也

訳ザンネンガラス。

海のほとりにてあざれあへる」など見えたり。 の巻に、「いとあざれ、かたくななる身にて」と有。 るは、ただここの所につきて解したる也。あまへたる義はなし。をとめ あざれ 同 (翻刻五○ページ) <a>(余)たみ詞に、「あまへされならん」といへ 土佐日記に、「しほ

訳オジャレル。

阿恵加。 |あゑか||三十丁ウ(顳刻五一ページ)||拾||和名抄第九淡路国、津名郡、平安 歟。然らば平安の字にて心得べきか。 此「あゑか」は郷の名なり。今の「あゑか」の心にてつけたる

平安の意にはあらず。用る意のうつりかはれるなるべし。 **玉拾遺に云々。もとは一ッ言なるべけれど、物語の「あゑか」はさらに**

と書べからず。 まめ心はなくてなよびがちなるにもいへり。「あえ」の仮字也。 新これは物のあやうきよりいでて、乳児のいと弱きにも、又かく女の 。「あへ」

|雅訳||「あへか」は、いとわかくて物はかなくよわき意也。

の敢と同じ意にやとおぼゆるよしもあれば也。猶考ふべし。 「あへ」と書たり。案に、これもすてがたし。「あへ」は「敢なし」など あるべし。仮字はしばらく平安の阿恵加にしたがひて物しつ。訳解には と「あゑか」とはいと異なれば、従ひがたし。雅語訳解のごとく心得て にも「あやうげといふ事也」とてむつかしくいはれたれど、「あやふげ」 (釈)此語の義、詳ならず。右に挙る説どもを思ふに、拾遺の説は小櫛に いはれたるがごとし。されども小櫛には此語の解なし。新釈は、夕顔巻

歌に、 しれもの三十丁ウ(翻刻五二ページ)「余」万葉集巻九、詠二水江浦島テ 「老もせず死もせずしてながき世にありける物をよの中の愚人の

訳バカモノ。

ゆきさすらへてけさはなきかな」。 で注せり。顕宗紀にも此字ありてサスラへと訓ぜり。文選寡婦賦にサスに注せり。顕宗紀にも此字ありてサスラへと訓ぜり。文選寡婦賦にサスに注せり。顕宗紀にも此字ありてサスラへと訓ぜり。文選寡婦賦にサスに注せり。一次のでは、大子美が詩は宿府の作なり。伶俜は行不正也と字書のできる。

で漂ひありく意也。といへり。これもよろし。おちぶれたれり。或抄には「流浪の字の心」といへり。これもよろし。おちぶれたれり。或抄には「流浪の字の心」といへり。これもよろし。おちぶれたる中には、流離よくあ

雅訳オチブレル。

思纒若草乃思就西云々」。
『起郷石草の思就西云々」。
『おもひまつはす』同(翻刻五五ページ)[拾]万葉十三の歌に、「藤浪乃おもひまつはす』同(翻刻五五ページ)[拾]万葉十三の歌に、「藤浪が

釈糸の物に纒はるによそへて、思のはなれがたきをいふ語也。

くすし 三十五丁オ (翻刻五七ページ) [余] 「何条」とかくはわろし。「何てなでふことか 同 (翻刻五七ページ) [余] 「何条」とかくはわろし。「何てないふことなりといいのできちぬい。十九に、「いにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬい。十九に、「いにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬい。十九に、「いにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬい。十九に、「いにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬい。十九に、「いにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬい。 一十八、「あやにくすしなでふことか」 三十五丁オ (翻刻五七ページ) [余] 「何条」とかくはわろし。「何てなでふことか」 三十五丁オ (翻刻五七ページ) [余] 「何条」とかくはわろし。「何てなでふことか」 三十五丁オ (翻刻五七ページ) [余] 「何条」とかくはわろし。「何てないることなり。

うさん」と云。又云、「いととり申がたきことなれど云々」。多ク引キタレド||余明石巻に、「源少納言、さふらひ給はば、たいめしてことの心とりまどの「とる」にて、俗言に、何事を御意に入れませうぞといふ意也。 | とりまうさん 同ウ (離刻五八ページ) [玉 「とり」は、御けしきとるな

といへるは、いといとひがことなり。(釈案に、小櫛の説はさる事なるを、余滴に「ただ、つけていへるまで也」長が「云々」とかけりしは、あたらぬ事也。

今略ク。ただ「申す」といへる詞に「とり」とつけていへるまで也。宣

ことのたえもせず」。元真集の詞書に、「久しくこずとて、ふすべて出ぬらするまでふすべかはして」。同書長歌、「ふじの山べの煙にはふすぶるふりの空に立ぬるはふすべやしつるくゆる思ひに、などとあり。さかしふす ぶる 三十八丁オ (翻刻六○ページ) (余)蜻蛉日記に、「もしほやくけ

ひとに」。

いふ。

「「爾製六二ページ[雅訳]テアライ。テツヨイ。手あらきさまをといふ詞、「か」は、例の形容辞なり。意は、いさみたちてきはきはしいいふ詞、「か」は、疾といふ事をり・ると活かして、「はやり」「はやる」 (根やりか) 同(離対 こページ (雅訳) テアライ。テヅヨイ。手あらきさま也。

べ」と書たるを、今改めたり。そのよしは首巻にいへり。それを重ねていへるにて、モットモラシイといふ意なり。さて仮字は「む諾する意にて、俗言にモットモといふにあたれり。「うべうべしく」は、諾する意にて、俗言にモットモといふにあたれり。「うべうべしく」は、

といふも同し意と聞ゆ。
「むく」の義、未ずおもひ得ず。意は訳解のごとし。「むくむくし」キミガワルイ。尾張の田舎の詞にムツケタと云、即是なり。
なくつけき 四十丁オ (翻刻六三ページ) [雅訳]ミグルシイ。オソロシイ)

つまはじき 同(翻刻六三ページ) (家高光集詞書に、「うちとけてもあらぬ人をわりなき所に引とどめて、かくやはとつまはじきをしかくれらぬ人の御ありさまなりや』とつまはじきせられ、うとましうなりみしらぬ人の御ありさまなりや』とつまはじきせられ、うとましうなりみしらぬ人の御ありさまなりや』とつまはじきせられ、うとましうなりて云々」。 南史、「宋順帝、禅二于斉」。 泣而弾指曰、願後身世々勿言復生言で云々」。 空蝉巻に、「『をさなかりけり』とあはめ給ひて、かの人の心をつまはじきをしつつうらみ給ふ」。

雅訳にくき物事を見聞時のしわざ也。

ちらす意也。其如く、式部が物語をいとわろしといひちらし給ふをいふあはめ。同(翻刻六三ページ)[新]「あばめ」は、家を発くといふはひらき

也。或説に出したる字どもは、みなあたらず。

がこと也。たみ詞の発といふ説も、いとわろし。「は」を濁りて拒也といひ、又いさめにくむやうの心などいへるは、ひ余河海に淡と有、よろし。淡しといへるにて、うとみにくむをいふ詞也

少しうけがたし。玉小櫛も河海によられたれど、猶いかが。郷うとみにくむ心とあるは、さも有べし。淡しとするといへるは、

雅訳サミスル。

やく意也。
五味にたとへていふなるべし。俗言に苦々しともいへり。ここは只つぶ五味にたとへていふなるべし。俗言に苦々しともいへり。ここは只つぶにがみ 四十四丁オ(翻刻六九ページ)(釈)上の新釈によるときは、これも

あなかま 同(離刻六九ページ) (新)今「ああやかまし」といふ、是なり。 「別此説の如くならめど、解ざまいとむつかしくやあらん。「かまびすし」の「かま、「やかまし」でふ語は見えず、「かしまし」とはいと上代よりいるが、「ああかしまし」でふ語は見えず、「かしまし」といふ、是なり。

やをら四十六丁オ (翻刻七三ページ) | 拾来らなり云々。本文二引ツ。

|玉||拾遺の説のごとし。俗言に「そろ」といふこと也。

みもしつべく」といへり云々。 おきゐたる、えせかたちは、つやめき、ねはれて、ようせずはほほゆがれきゐたる、えせかたちは、つやめき、ねはれて、ようせずはほほゆがむ也。和名豆良、一云、保々、面旁目下也」。かほをかたぶくればほほのゆがむ也。 はほゆがめて 同ウ (翻刻と四ページ) [拾]和名抄云、「野王按云頬、音狭、

類のゆがめるは見ゆべくもあらず。 類のゆがむをいへるにはあらじ。ここも物へだてて聞給ふなれば、そのじか。此詞、たとひ本は頬のゆがむより出たるにもあれ、かならずしもむ也」といへるもいかが也。枕冊子を引たれど、かれも頬の意にはあらいがこと也。又拾遺に「頬也」として、「顔をかたぶくればほほのゆが玉河海をはじめ、細流・孟津などに「ほほ」を方の意に注せられたるは、玉河海をはじめ、細流・孟津などに「ほほ」を方の意に注せられたるは、

(釈なほ類ゆがみの意也。さて、これはまさしく頬のゆがむ意にはあらい。今俗の語にも、ただ「悟し」といひても有べきを、「頬にくし」なり。今俗の語にも、ただ「悟し」といひても有べきを、「頸にくし」などいふ事あり。これも其事がらをけにくくいひなさんとていへると同じく、かかる事外にも猶多し。拾遺の説は、解ざまいかが也。小櫛は、事の情は得られたれど、さりとて頬といひたるを何事ともいはでは、事の情は得られたれど、さりとて頬といひたるを何事ともいはでは、事のの情は得られたれど、さりとて頬といひたるを何事ともいはでは、事のの情は得られたれど、さりとて頬といひたるを何事ともいはでは、事のの情は得られたれど、さりとて頬といひても有べきを、「頸にくし」ながむましてゐる故に、物いひのほほゆがみていふやうに聞ゆる也」とかるは、正しく頬をゆがめて物いふ事と見られたりと聞ゆ。さては文の義いたく違ふべし。ただ「ほほゆがむ」といふ詞あるをもて、ゆがむことを強くいはんとて頬を添たるのみ也。

がごとく、その位階分際をいふ詞とす。

「はか」は、「そこはか」の「はか」に同じく量度の語なるたる例なし。「はか」は、「そこはか」の「はか」に同じく量度の語なるお物にさまざま字をあてたるは、皆推量のみ。其字どもを「あて」と訓諸がにさまざま字をあてたるは、皆推量のみ。其字どもを「あて」と訓書の二字を用ゐたり。高貴の人ぶりてすがたよろしきをいふなり。

しらず。細流の二字、日本紀に有ことなし。||余||河勝人。細姙妍日本紀。契沖云、河海に出されたる字、何に出たるか

雅訳ウチアガッテヰル。キヤシヤナ。品ガヨイ。

(釈)「あて」の義、詳ならず。意は訳解の意をおのおの相兼たり。新釈の形がと同しく、形容辞と見て有べし。そのうへ高貴二字の意のみには始め玉かづまに弁へられたるがごとし。そのうへ高貴二字の意のみにはあらず、うつくしく品のよき意などかねたれば、此字のみにては解がたし。「はか」の義、詳ならず。意は訳解の意をおのおの相兼たり。新釈のやかと同しく、形容辞と見て有べし。

かの後妻に配せんにもつきづきしき也。 四十八丁ウ (翻刻七六ページ) [新]着々敷にて、似着こと也

雅訳ニツコラシイ。モットモラシイ。

なるべし。 五十丁オ (翻刻七八ページ) [拾] 「すぢかひ」 五十丁オ (翻刻七八ページ) [拾] 「すぢかひ」 は筋替、角違なすぢかひ」

「愕然、於比由」。 本とおびゆ 五十一丁才(翻刻八○ページ) (索) ともえ聞えず」。宇治拾遺、「はやく左の目にいたつきたちにけり。 『や』ともえ聞えず」。宇治拾遺、「はやく左の目にいたつきたちにけり。 『や』ともえ聞えず」。宇治拾遺、「はやく左の目にいたつきたちにけり。 (深) 新後拾遺集釈教大納言道

るまでこ。(釈万葉二、「吹なすふえのおとはあだ見たる虎かほゆると諸人のおびゆ

(釈)「すく」は、「きすく」「すくすくし」などの「すく」に同じく情なき意

「よか」は、例の形容辞也。

辞也。「とをを」などのとをも同じ。と通ひてたわたわとしたるさま、「やぎ」は、「やぐ」ともはたらく形容と通ひてたわたわとしたるさま、「やぎ」は、「たわむ」などの「たわ」たを、は、「たわむ」などの「たわ」

おろかならず 五十四丁ウ(翻刻八四ページ)(釈)「おろか」は、「おほらか」と同じ言の約りたる也。おほはすべてとりしまらぬ意なること、上にたろか」といふも、細しからず大らかなる心をいふ也。さて「おろかならず」は、「細やかに」といふ意にて、こまやかに語らひ給ふといふ義也。ず」は、「細やかに」といふ意にて、こまやかに語らひ給ふといふ義也。す。は、「何事にまれ、其をとりたてて事とする意にて、とりたててあかくなるなり。家持集といふ物にある歌に、「秋風はことと吹来ぬ」とあるも同じ。河海に「事と也」とある、よろし。「わざとがましき心也」とあるはたがへり。細流に「ことでとく」とあるはかなはず。

|雅訳||何事にもあれ、其事を取立て事とする意也。俗にキットヨイなど

ふつつか 六十丁オ (翻刻九三ページ) 1拾万葉十七に、太馬を「ふつま」訳 ヲシイモノニ。 (釈)可惜の字を訓来りたるがごとし。古事記の「阿多良斯」は猶異なるべし。

とよみたれば、「ふつつか」は、人のふとり過たるがいやしげなれば、

とのわろきまではあるまじき也。
過、紙のうす過たるもわびしくわろけれど、ふつつかなるとあつ過たる過、紙さへわろき事をいふとてかけるも、准らへておもふべし。人のやせといふ歟。末摘花巻に、「みちのくにがみのあつごえたる」と、文かけ

○空蝉巻語釈

か」は拘はる義なり。俗言にカカリアヒといふに等し。 かかづらひ 初丁(翻刻四ページ)(釈)「かかづりあひ」の約りたるにて、「か

ねて結び終る意を本にて、何事にも竟をつくることにいへり。 といふがごとし。空蝉のかくれたる所なるゆゑに「たどり」とはいへる也。 といふがごとし。空蝉のかくれたる所なるゆゑに「たどり」とはいへる也。 たどりよらんも 同(翻刻四ページ)釈探り寄る意にて、「たづねよらん」

雅訳シマヒ。

の意には遠し。
「日本紀の慨哉などを引たるも、本は一ッながらここく甚しき也。旧注に日本紀の慨哉などを引たるも、本は一ッながらここの意になる。」

ほしを障断る也。「紛らはし」などいふも、これをはたらかしたる也。き几帳といふこと也。すべて「まぎる」といふ語はみな此意にて、見とまざるべき 三丁オ (翻刻七ページ) (釈]目遮の意にて、人の目を遮るべ

俗言にミスボラシイといふに近し。をのげなき。同(翻刻七ページ)釈物気無にて、物々しき気のなきよし也

ないがしろに 同ウ(耐刻八ページ) || |雅訳||ゼニメガナイ。位ガナイ。「ものものし」のうらなり。

それよりおこりて、

万の事しななくて、

したたか過たるを「ふつつか」

がへるにはあらねど、 ここにては、きたる物かともせぬ様也。「しどけなし」と注せるも、 よくはかなはず た

雅訳シドケナウといふ意になる事有。慢りたるさまなれば也。

とも、しどけなくばうそくにひきなされ、とりはづしては胸ひろがりて 御むねにつねづね御心をそへられ候はねば、いかにうつくしきえりなり ちのしたまであきとほり、見にくき事も出るものにて候」。 此外に見えず○「身のかたみ」といふものに、「第七、御ひきあはせの事、 ほくみる時なん、すきたる物きたるは、ばうそくにおぼゆる」と見えたり。 さならずは、僕遬か云々。源語のうちにては、かげろふの巻に、「人お よませて、ふるくいひならひたれば、大かたは此字なるべし云々。もし **|余||おもふに、凡俗の字なるべきにや。遊仙窟にも出て、「ただびと」と 新**傍若無人の意なるを、さまでは詞のしたたか過たれば、傍若とのみ いひてしらする也。且「じやく」を「ぞく」と訓は、此国の唱への例なり。 同 (翻刻八ページ) |拾| 放俗なり。「は」を清て「そ」を濁るべし

ク例ナレバ、今 ク例ナレバ、今 ク例ナレバ、今 ク例ナレバ、今 訳ジダラク これもいかが。すべてかやうの字音の詞は、その意によりては字は当が の側までも見ゆるを「側を暴す」といへるにもあらん歟。ここにも「む 字などにやあらん。余滴に引る「身のかたみ」に、「むねひろがりて乳 釈右の説ども、いづれもげにいはれたりとおぼゆるもなし。玉小櫛に り。猶考ふべし。 ねあらはに」といふより続けたるを思ふに、さるさまなるべくは聞えた の下まであきとほり」といへる、すなはち暴側の意にて、胸のあきて身 たきもの也。字は字にて、意はあらぬさまにも転し用るものなればなり。 **玉]傍側、飽足など注あれど、いかが。拾遺に放俗の字をあてたれど、** いはれたるやうに心得てあるべきなり。されどなほ試にいはば、暴側の

キニヤ。コレハモサル類トスベ

ぶ。 ハ音「泊」 ニテ、 ハ音「泊」 ニテ、 アランド

ノ字音ヲ用·

雅訳ゾラク。

つぶ二つぶなどいふ、それより転じて、こえ丸がりたる心にここにはい つぶつぶと 同(翻刻八ページ) | 新]「つぶらか」とは、丸き物の形を一

つぶさなるなり。 雅訳。マルマルと訳する時は、つぶらなる也。コマゴマと訳する時は、

そぞろか 同 (翻刻八ページ) [新]大どかならで、すずろに心かろきさま なること、 上にも下にも見ゆ

そもじも清てよむべし。古事記上に、「於「天浮橋」字岐士麻理蘇理多々 をかよはしいへるにやあらん。さらば「すずろ」とは本より別なる語也 聳えて高きさまとは聞ゆれば、ここもその意にて、「そそりか」といふ とよめることあり。この「天そそり」、いかなる義とも知れねど、天にとよめることあり。この「天そそり」、いかなる義とも知れねど、天に **ごとく聞ゆ。かれ考るに、万葉集詠『立山』賦に、「天曽々理たかき立山」** 例ども挙たる、其外をも考へわたすに、げにもたけ高きさまをいふが (釈)この語、大かたは新釈のごとくにてかなふべし。然れども、余滴に え給ひける」。河海に「たけの高きさまにや」といへるは、よき説なり。 まさり給へり云々」。柏木に、「たけだちものものしう、そぞろかにぞ見 云々」。とりかへばや三、「これは今少しそぞろかに、なまめけるけしき |余狭衣に、「つきづきしうそぞろかなるかたちなど、 いとどいみじう さがりば同(翻刻八ページ)「余」枕草子に、「うらやましき物。かみなが **斯弖」とある「蘇理」も、かよひて聞ゆるやう也。暫く余滴に従ふべし**

濁るは音便也。 一新さがりたるほどあひを云。万葉に「かやかり許爾」といふ「ばか」 の如く、その程量を「ばか」といふを、 くうるはしう、 さがりばなどめでたき人」。 略して「ば」とのみもいへり。

釈顔髪の下りたる端の事也。端をはとのみいふは、軒端・山の端など のはに同じ。新釈の説はいたくたがへり。

婦負の字を禰比とよめる也。此負は媍と同じくて、老女の称なり。 和名抄に、「能登国婦負郡禰比」とあり。これも年更たるをいふ詞ゆゑに など有と同語にて、としのふけたるをいふ也。語釈は詳にしりがたし。 ねびれて 同ウ(翻刻九ページ)||新春海考るに、「ねびれ」は、「ねびまさる」 ともいひ、夫を活らかして「おほどく」ともいふにて知べし。ザワヅク。 か」の活きたる也。「どか」は「らか」の類也。「大らか」を「大どか」 さうどけば 四丁オ(翻刻九ページ) 雅訳 「さう」 は騒なり。 「どく」 は「ど

余契沖云、としのふけたるをいふ。

みづしからぬをすねびたる木也といふ。是にて過捻ぶりの意なるべし」 頭書に挙たる玉小櫛のごとくなるべし。但し、「草木の萎しぼみたるや 釈此説どもは、「ねび」といふ語にはかなへれど、ここにはいかが。「鼻 に「鼻の高からぬよし也」と有ぞよろしき。 などいはれたれど、すべていかなる事とも聞わきがたし。大かたは細流 うのさま也」といはれたるはいかがなり。新釈にも「俗に木などのみづ などもねびれて」とつづきたる語勢、さらに年のふけたる事とは聞えず。

づきざればみたる」といふに、万葉の「いそばへをる」てふ語を引てい そぼるれば 同(翻刻一○ページ)||新|||そばへるをいふか。上巻に、「そば へるがごとし。又そぞろくをいふか。

釈新釈に「そばへるをいふか」とあるはよろし。「そぞろくをいふか」 ざま今めかしうそぼれたり」○「そそく」といへるに似たり。 **|余||若菜上、「なし、かうじやうの物ども、さまざまに箱のふたどもにと** わかき人々そぼれとりくふもあり」。こてふの巻に、 「かき

とあるもかなふべし。「そばづき云々」とあるはいたく違へり。

雅訳ソソカシイといふに近し。

みして愚か也てふ意なり。 下していふ語也。才あるを「かど有」といふに対へて、かどなく丸くの まろ 六丁オ (翻刻二ページ) |新| 「まろ」とは、むかし男女ともに我を

男ならばコノ方、女ならばコチャといふがごとし。 |雅訳||男女ともに自称の詞也。少しはげみ高ぶるこころあり。 今の世、

釈打とけていふ語ときこゆ。新釈の説は暗推にちかし。

葉に例有。されど、ここなどは「いとしばらく」の事に用ゐたり。 とばかり同ウ(翻刻二ページ)「新」「時ばかり」を略しての語也。 に「夜のふけぬとに」とあるは、「時に」の略也。

釈此説もいかがあらん。ただしばらくの間らひをおもはせたる語とし てあるべし。

訳 チトバカリ。シバラクノウチ。

ず」といふがごとし。 「いもねず」「いをぬる」などあり。引切もせずといふ心を「ひきもきら ちあらんともおぼえず。 よくねらるる事也。ただ「ねる」といふとはすこしくかはれり○朗云、 いだにねられず んともおぼえず。いぬ二言のつづきたる間にてにをはを入ること.熟睡を「うまい」にあてたるなどを見ていへるにや。さるわか 七丁オ(翻刻一三ページ)「余型沖云、「い」は、 心の

くてにをはをそへて和語のごとくしたるは、 いふ類なり。 しふねき
八丁ウ(翻刻一六ページ)「雅訳」執念しきなり。字音にはたら 装束するを 「さうぞく」と

何のこころもなくうちとけたるさま也。 らさびしき」「うらがなし」などのうら也。 うらもなく 九丁オ(翻刻一六ページ)(釈)「うら」は心の裏の事にて、「う されば、心もなくといふ義にて

|訳 何ノワケモナウ。オクソコモナウ。

うつせみ 十一丁オ (翻刻三○ページ) [新]うつせみは、万葉のころまで に至りては、ひとへにもぬけの事とのみ思ひ誤りたるを、紫式部の比にもいへるを、ただ蝉のもぬけの事とのみ思ひ誤りたるを、紫式部の比にもいへるを、ただ蝉のもぬけの事とのみ思ひ誤りたるを、紫式部の比にをりては、ひとへにもぬけの事とのみおもへるもうべなり。此女房かくかしこしといへど、時に古学のなければをしむべし。

釈うつせみの解は右にいはれたるごとくなれど、ここにうつせみといいりつせみの解は右にいはれたる正となれども、此語によりて蝉をなし。それやがて歌の巧なるなり。このかへし歌に、「うつせみの羽にける」とあるが、やがてもぬけたる事也。然れども、此語によりて蝉をなし。それやがて歌の万なるなり。このかへし歌に、ここにうつせみとい釈うつせみの解は右にいはれたるごとくなれど、ここにうつせみといいり。

夕顔巻語釈

訳ムシヤクシヤトシタ。ムサクロシイ。 (歌)すべて「むつかし」といふは、物の繁くわづらはしきをうるさがる家どもの立こみたるをいふ。下京辺のさま、むかしもさぞ有けん。 すっかしげ 一丁オ (翻刻四ページ) (新)むねむねしからずきたなげなる

ひたひつき同(翻刻四ページ)(釈)このころの女は髪を垂たる故に、ふ

やつし やつる 同ウ (離刻五ページ) (釈) 「やつす」は、形をわろくし でしのびまぎらはすをいふ。今世にいふとはいたく異也。俗言にミスボ うかうスルといふ意也。又「やつる」といふは、おのづからミスボラシ うなる事にて、形の痩衰ふるさま、またおのづから形のわろくなるをい なるをいる。今世にいふとはいたく異也。俗言にミスボ のでまざきに のでまざらはすをいる。今世にいるとはいたく異也。俗言にミスボ のでまざい。

カルイナリニナル。 [雅訳]忍びて出立時、軽く身ごしらへをし、わろきのり物にのるをいふ。

をに、「『こちや』といへば、ついゐたり云々」。 巻に、「『こちや』といへば、ついゐたり云々」。 巻に、「『こちや』といへば、ついゐたり云々」。 巻に、「『こちや』といへば、ついゐたり云々」。

釈此末、例ども多く挙たれど、今略きつ。

よろぼひ 同(翻刻六ページ) 拾一徒 倍、ヨロボフ、神代紀下。

まぐま予呂朋譬ゆくかも」。
|余仁徳紀、「天皇幸二山背」時、視□桑枝沿□水而流□歌之曰云々。河のく|

訳ヒヨロヅキ。

雅訳オモダタヌ云々。

あやめ 同ウ (翻刻七ページ) |河[綾津、『東洋、『文音。 文を「あや」とよむ也ををいへるなり。

うぞうしき小路也」と注せるは、すこしたがへり。 例の語と聞ゆ。「がはし」は、形容をたとへいふ辞なり。万水一露に、「そしき也」といへる、よろし。「らう」は、乱字の音をなだらかにしたるの音がはしき 同(離刻セページ)(釈)湖月抄傍注に、「乱、みだりがは

よろこび同(翻刻セページ)(釈)此詞、かく体言にいへるは、今の俗言

なり。
ことあり。そは常のごとくうれしく思ふ意也。何れも今俗にいふとは異ことあり。そは常のごとくうれしく思ふ意也。何れも今俗にいふとは異する意より転れるなるべし。又帚木巻に、「よろこびに思ひ」といへるに礼をいふといふにあたれる事、先達のいはれたるがごとし。歓びて謝

老の泪もろに、口つきひそみて、源に見ぐるしく御覧ぜらるる也。そむ」は、さる口つきをむかしいひけん證とは、六帖を以てしるべし。と有を、六帖に、「ひそむとも」と有。是万葉の訓をば誤りしかど、「ひ葉に、「百とせに老舌いでてよよむともわれはいとはじこひはますとも」ひそみ 三丁ウ (翻列パページ) [新]なかんとする時の口つきをいふ。万

(釈)源注拾遺の帚木の「うちひそみぬかし」とある所の注にも、万葉集やしくひがひがしくもてなし給ふを、もどきくちひそみ聞ゆ」。 にわたるなるべし」。雅望按ずるに、あげまきの巻に、「姫君の御心をある明云、「『ひそむ』は、眉にも口にもいづこにもかぎらず、顔のうち

(ビリクチスル、ナキガホスルといふにあたれり。 を事にて、「ひそむ」とは異なれば、いたづら也。「ひそむ」は、俗言にいへるは、さも有べし。されど本は口もとより出しにこそ。さて新釈にいへるは、さも有べし。されど本は口もとより出しにこそ。さて新釈にいかるは、さも有べし。されど本は口もとより出しにこそ。さて新釈にも拾遺にも「よよむ」といふ事を引れたれど、「よよむ」との「老舌出而与余牟とも」といる事を引出ていはれたれど、「よよむ」との「老舌出而与余牟とも」といる事を引出ていはれたれど、「よよむ」との「老舌出而与余牟とも」といるにあたれり。

と読たれど、今は衝突などの字なるべし。 氏漢語抄云、牛相觝豆木之良比、以、角觸、物也」。觝の字「つきしらひ」氏漢語抄云、牛相觝豆木之良比、以、角觸、物也」。觝の字「つきしらひ」と読れる抄云、「説文云、觝丁礼反、楊

しろひ」などの如く、互にする意也。「しらひ」と「しろひ」とは、音秘「つき」は、げに衝突などの意也。「しろひ」は辞にて、「あへしらひ」「引

三六

通ひて、同じことなり。

めくはす 同 (翻刻九ページ) [余]いせ物語に、「世をうみのあまとし人を がらにめくはすれば、はしりよりて云々」。若菜上、「『あなかたは がらにめくはせよともたのまるるかな」。清少納言に、「かつぎする がらにめをくはすれば、はしりよりて云々」。若菜上、「『あなかたは がるがらにめをくはすれば、はしりよりて云々」。若菜上、「『あなかたは がるがらにめをくはすれば、はしりよりで云々」。若菜上、「『あなかたは がるがらにめをくはすれど、ききもいれず云々」など有。

たきにたとへいへる語なり。 | 釈塩の垂るは、沾しめりて干がたきものなるを本にて、涙のかわきが | 家斎宮式に、「哭称二塩垂二」とあり。

よりこちごちしき人にて」。 ばうざ 五丁オ (翻刻一○ページ) [余]土左日記に、「舟ぎみの病者、もと

(歌病者をつづめて「ばうざ」といふは、言をなだらかにする例のことなり、 歌病者をつづめて「ばうざ」といふは、言をなだらかにする例のことなり。 古歌に『ひたち帯の』とつづけたる、これにおなじ。『かたばかり』 などいふにかよひて聞ゆ」 雑々記。 六帖、「東路の道のはてなたばかり』 などいふにかよひて聞ゆ」 雑々記。 六帖、「東路の道のはてなたばかり』 などいふにかよひて聞ゆ」 雑々記。 六帖、「東路の道のはてなたばかり』 などいふにがより、「余契沖云、「栄花物語に、『わかごとばかり』 といふは、言をなだらかにする例のことなり。

てかく 十二丁ウ (翻刻三ページ) (家柏木巻に、「ここちせんかたなくでかく 十二丁ウ (翻刻三ページ) (家柏木巻に、「ここちせんかたなくでかく 十二丁ウ (翻刻三ページ) (家柏木巻に、「ここちせんかたなくあふせと思ひしにてかくばかりになりにけるかな」。 常夏巻に、「御あるせと思ひしにてかくばかりになりにけるかな」。

れがし」也。「なにくれ」などいふ「くれ」なり。れがし」也。「なにくれ」などいふ「くれ」なり。「なにがしくれがし」とは、「それがし」とは、「それがし」とは、「それがし」とは、「それがし」とは、「それがし」

釈「くれ」は、「これ」といふ意なるが、くとことかよふ例あり。

さまする」と常にいふに同じ。 は、おぼろおぼろとしてことの意をわかぬさま也。さて、「そらしらぬは、おぼろおぼろとしてことの意をわかぬさま也。さて、「そらしらぬ

で同じ例也。 へんぐゑ 十五丁ウ (翻刻二七ページ) [余] 「くゑんぞく」「ほくゑ経」な

物の変化して形をあらはしたるをいへる也。ただにけとよむといふ説は、わろかめり。さて、「物の変化」とは、鬼寒蹶速といふ人名を、紀にクエハヤと有。けを重く唱ふる時の音と聞ゆ

いたれることあり。これらをいふならん。るに、其苧は戸のあなより通りて有を、とめ行てみむろ山の神の社までるに、其苧は戸のあなより通りて有を、とめ行てみむろ山の神の社までかよひて、其住所しられねば、男の衣のすそにへその苧をつけこころみ「新古事記に、溝くひひめのもとへ、誰ともなくうるはしき男の夜のみ

ていはく、「君がくしげの中にをらん。おどろく事なかれ」。やまとととることなし。ねがはくはしばらくとどまれ。いましが形を見ん」と。答と姫の尊、夫に語ていはく、「君常に昼は見えず、明らかにみかほを見ほものぬしの神の妻也。然るを、其神昼は見えずして、夜来る。やまと河三輪明神、倭迹々日百襲姫命にかよひ給ひし也。日本紀の心は、お

小蛇あり。おほん衣紐のごとし云々。下略。如っぱつり、心の内にあやしむ。夜明て、匣をひらきて見るに、うるはしき姫の尊、心の内にあやしむ。夜明て、『シャ

て云々」などいふ事もあれど、うるさくて今はぶきつ。にここに記しつ。なほ河海には、「中関白殿の赤染之兄弟の女に語らひ右の准拠ども、さしも用なき事なれど、何れの抄にも挙られたれば、因

でほごほと 十八丁オ (翻刻三 ページ) [余]これは、ことに物語ぶみにおまた見えたる語なり。ひとつふたついはば、うつぼ物語国ゆづりに、「御あまた見えたる語なり。ひとつふたついはば、うつぼ物語国ゆづりに、「御居風御几帳もごほごほとたふれぬ」。蜻蛉日記に、「まだひるより、ごほがたけたとするぞ、ひとりゑみせられて」。 枕草子に、「やり戸などあくるもいとにくし。 すこしもたぐるやうにてあくるは、なりやはすあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるは、なりやはすあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるは、なりやはすあでるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるは、なりやはすあでほどはとなれば」。 雅望按ずるに、万葉巻十六、「つくゑの島のしただいを云々、早川に洗ひすすぎから塩に古胡ともみ」とあり。古胡も物のみを云々、早川に洗ひすすぎから塩に古胡ともみ」とあり。古胡も物のみを云々、早川に洗ひすずぎから塩に古胡ともみ」とあり。古胡も物のいたなどいへるに同じかるべし云々。朗云、上略皆声をかたどりたる言ばたなどいへるに同じかるべし云々。朗云、上略皆声をかたどりたる言はたなどいへるに同じかるべし云々。朗云、上略皆声をかたどりたる言ばたなどいへるに同じかるべし云々。朗云、上略皆声をかたどりたる言ばたなどいへるに同じかるべし云々というなどのよりにないないというなどものであるでは、「はいっぱいとは、「ないっぱいというなどのでは、「ないっぱいというなどものでは、「ないっぱいというないっぱいというないっぱいというないというない。

に同じ。いへるはわろし。古胡とは、俗言にコクコクト、又コッコトなどいへる(釈)「声をかたどりたり」といふにて、事足るべし。「古胡をのべて」と

てちたし 二十丁ウ (翻刻三四ページ) [拾]「こちたし」は、万葉に言痛とも事痛とも書て、おほき詞なり。心にかはる所あり。人の言をいたむとも事痛とも書て、おほき詞なり。心にかはる所あり。人の言をいたむ

くはわづらはしくくだくだしき意に用ひたり。意の転れる也。さてここは言痛の意にて、言のおほき意也。此詞、物語の中にては、多には「事」「言」をたがひに通はして書たれば、強て此字になづむべからず(釈)「こといたし」のどいの反ちとなる故に、「こちたし」といふ。万葉

雅訳
ヤカマシイ。クダクダシイ。ギヤウサンナ。

こころもとなかめり 同(翻刻三五ページ) (余) これは品定の巻に、夕底をいへる所に、「この心もとなきも、うたがひそふべければ」といへるは誤っていばみたるかたをすこしそへたらば」とさへぞのたまひし。ここの「心ばみたるかたをすこしそへたらば」とさへぞのたまひし。ここからさきをたのませ給へるに、ここの歌に「行すゑかねてたのみがたさいとよめるなど、かやうに大どかなるが心もとなき本性也といへるよ」とよめるなど、かやうに大どかなるが心もとなき本性也といへるまは、歌よむことの未熟なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きは、歌よむことの未熟なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きは、歌よむことの未熟なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きは、歌よむことの未熟なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きは、歌よむことの未熟なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きは、歌よむことの表表なるよしにて、紫式部が卑下也」といへるは誤きない。こころもとなきは、夕顔の歌をさして其本性をいへる也。

の説も誤にはあらず。とあるもの辞にて、落着は本性の心もとなきをいへる意とは聞ゆ。小櫛とあるもの辞にて、落着は本性の心もとなきをいへる意とは聞ゆ。小櫛いへるなれば、歌の未熟なるよしなること論なし。されど、「すぢなども」をは釈この説さる事のごとくなれど、猶歌をさして「かやうのすぢ」とは

いざよふ月に 同(翻刻三五ページ) 「たゆたふ舩」などいふを見よ○常樹云、家隆卿の「いるもいさよふ」の意をいはば、出る月にのみいふべきならぬ事は、万葉に「いさよふの意をいはば、出る月にのみいふべきならぬ事は、万葉に「いさよふの意をいはば、出る月にのみいふべきならぬ事は、万葉に「いさよふ」とは、専ら出んととよまれしは、是より得られけんかし。

②京万葉第七、続後撰雑中よみ人しらす。
河山のはにいさよふ月をいでんかとまちつつをるに夜ぞふけにける

雅訳」立やすらふ意也。月のいさよひ、同意なり云々。

経、回旋為」、営」。又考るに、警営の字にてもあるべきか。 はいなる御けいめいにこそ有けれ」と有。「けいめい」といへるは音便也。 上林賦に、「逶迤経」、営乎其内」」と有。「けいめい」といへるは音便也。 ・大賦に、「逶迤経」、営乎其内」」と有。此巻の末にも此詞見えたり。 はいなる御けいめいにこそ有けれ」と有。此巻の末にも此詞見えたり。 はいなる御けいめいにこそ有けれ」と有。此巻の末にも此詞見えたり。

そらめ 二十三丁ウ (翻刻三九ページ) (余)河箋拾遺雑下、「かもにまうでけいるを、男の見侍りて、今はなかくれそ、いとよく見てきといひおこれはわれかや」。

釈これは空目といふ語の類例まで也。

あいだれたり 二十四丁オ (翻刻四〇ページ) 河あまへたるやうなる体

ふべし。 |釈||この御説のごとき意とは聞えたり。案に、愛垂といふ義にや。猶考

花きたる物の身につくほどぬれたるをいふ也

||余朗云、「シトシトノ略。 今シトシトト云」。

書たり。されば、本は「しぬぬ」なりけんを、怒字を漢音にドとよみ誤釈案に、河海に引れたる歌の二句を、万葉集に「之怒々爾所沾而」と

なり。くして、沿たるさまの甚しきをいへり。俗言にシッポリヌレルといふ意約れる言と聞えて、しぬはしなへたるかたち也。さて意は転りても同じ約て「しとど」とはいひそめしなるべし。「しぬぬ」は「しぬぬれ」のりて「しとど」とはいひそめしなるべし。「しぬぬ」

ふ意なり。 又臥てとはかさねいへる也。今の言にていはば、うつぶしにふしてといの意にて、面を内にして伏すさまなり。さて一ッの語となりたる故に、の意にて、面を内にして伏すさまなり。さて一ッの語となりたる故に、内伏

いへり。此説のごとく、鬼物に気を奪はれたるをいふ。
けどられ
同ウ(爾刻四五ページ)(釈或抄云、正気をとられたるなりと

あへり。むくむくしくききならはぬここちし給ふ」。 |余||あづま屋の巻に、「『かかる人の供人こそ心はうたてあれ』などいひむくむくしさ|| 三十丁オ (翻刻四八ページ) ||河]いぶせくおそろしきなり。

ケタと云、即是なり。||雅訳||ミグルシイ。オソロシイ。キミガワルイ。尾張の田舎の詞にムツ||雅訳||ミグルシイ。オソロシイ。キミガワルイ。尾張の田舎の詞にムツ

ごとく、猶心づきなくあらびたる意をもかねたり。 意にとられたるか、いかがあらん。つかひたる意は雅語訳解にいへるが釈√がく」の意は未思ひ得ず。河海に蠢字をかかれたるは、むぐめく

|雅訳||オイオイトナク。||この「よよ」はなく時の声と聞ゆるを、「口つき也」と有は少したがへり。||釈||万葉に「よよむ」とあるは、舌のもつれて声のあやなき意と聞えたり。

んなし」は、たよりのわろき事、又たつきなき事をいふ。転りて、つきびんなかるべし 同(翻刻五二ページ)(釈)「びん」は便字の音也。「び

なきこと、不都合なる事にもいへり。

にも「美豆波」とこそ書たれ。かの檜垣の嫗がよめるも同じ。 いへり。後撰「としふれば我黒かみもしら川のみつわぐむまで老にけるいへり。後撰「としふれば我黒かみもしら川のみつわぐむまで老にけるいる。一説、年よりぬれば、腰かがまりせくぐまりて二の膝とがり出たる中に、かしらまじはりて、三の輪をくみいれたるがごとく也云々。 「一説、年よりぬれば、腰かがまりせくぐまりて二の膝とがり出たる中に、かしらまじはりて、三の輪をくみいれたるがごとく也云々。 「一説、年よりぬれば、腰かがまりせくぐまりて二の膝とがり出たる中に、かしらまじはりて、三の輪をくみいれたるがごとく也云々。 「一説、年よりぬれば、腰かがまりせくぐまりて二の膝とがり出たる中に、かしらまじはりて、三の輪をおぼえていふ説は、皆誤也。右合ひくみあふ様になるをいへり。三輪とおぼえていふ説は、皆誤也。右合ひくみあふ様になるをいへり。三輪とおぼえていふ説は、皆誤也。右合ひくみあふ様になるをいへり。三輪とおぼえていふ説は、皆誤也。右右できるがあるも同じ。

(金)年ふれば云々、後撰雑三にありて、詞書に、「つくしのしら川といふをおの」とあり。「水をくむ」といふにかけていひたる詞なれば、かと書べらげの骨」てふ歌、袋草子にも引て、落句「あひにけるかな」とせり云々。らげの骨」てふ歌、袋草子にも引て、落句「あひにけるかな」とせり云々。らげの骨」てふ歌、袋草子にも引て、落句「あひにけるかな」とせり云々。かきたるをよめとおほせごと侍ければ、水をもていでてよみ侍ける。ひがきのかげ見ればみつはくむまで老ぞしにける」。又重之集に、二の句「すめる泉の」とあり。

なへりとも聞えず。歯の落たればとて、必三ッさしあひくみあふ物にも同じ意とは聞えたり。然れども、「三歯くむ」とていはれたる説は、か詳ならず。新釈に今昔物語を引れたるにて、「みつはさす」といへるも釈後撰集の歌、檜垣が集には、「老はててかしらの髪はしら川のみつは

腰膝のかがまる也」と注せるは、旧説のままなればたのみがたし。ばらく年老たるかたちとのみ心得てあるべし。雅語訳解に、「極老にて、説のごとくにては聞えがたし。猶異なる意あるにこそ。考ふべし。しあらざればいかがなるに、「くむ」といひ「さす」といへる意も、かの

かごか 同ウ (翻刻五三ページ) [河]四囲ともいふ。かこめる心なり。四方

といふこころ也。 (雅訳)ひそみかくれて静なる心ときこゆ。湖月抄に「カンゴリとしたり」

云々、御そにおしくくみてゐておろし奉らせ給ふ」。 侍けるおしくくみに書付侍ける云々」。若紫に、「ひとへばかりおしくく なて」。子花物語に、きかばわびしとなける女房、「うせさせ給ひぬればりるおしくくみに 同 (翻刻五三ページ) (余)金葉集雑下、「大路に子をすてて

「わが子羽裹」とも書たり。郷これらは類例也。さて、「くくむ」は「つつむ」といふに同じ。万葉集に、

今俗の言に、物を造るを「こしらふ」といふをも思ひて、よきさまに作の意のみにはあらで、心をとりてあざむきすかしなだむるをいふ詞也。れ、孟津に「異見をする也」とある、共にあたらぬにはあらねど、猶ここしらへおき 三十七丁オ (翻刻五八ページ) (釈)源注拾遺に喩字を挙ら

釈 夕 顔

りなす意なるを知るべし。

雅訳ナダメル。取ナス。スカス。ススメル

みづからいたつくをいふ。本は、馬、舩などより下立て、手づから其事 をとりていたつく意より出たるなるべし。 おりたちて同(翻刻五九ページ)(釈此詞は、其事を人にまかせずして、

の語は上に挙たり。 御やつれ 三十八丁オ (翻刻六〇ページ) 駅やつれ・やつると用く言を 体言にしたるにて、ここは源氏君の御しのびすがたをいへる也。「やつる」

わが身のゆきかへりみちのそらにて消ぬべきかな」。 ごと道のそらぢにわかれする君」。新古今恋三道信朝臣、「心にもあらぬ 道のそら 四十一丁オ (翻刻六四ページ) [拾]万葉巻十五挽歌云、「いめの

|余||小大君集に、「[®]あされども草葉の露やとはれまし道のそらにてきえ べらなる」。 なましかば たちてゆくゆくへもしらずかくのみぞ道の空にてまどふ

ŧ はぶれ 埒」などいふは、古語しらぬ人のふといひ出しもの也。 れ出るやうのことにたとへていへり。此物語に「あぶれ」ともいへり。「放 きみを島にはぶり」といふも、 みな通ひて、身の行方なくなるも、心の品なくなれるも、水のあふ 同(翻刻六四ページ)|新|溢を崇神紀に「はぶれ」と訓り。万葉に「大 古今に「心をだにもはぶらさじ」といふ

拾「はぶれ」は、 ふ詞也。「はぶれ」とは大に違へり云々。下略 れたり。孟津に「放埒」とあるは、音にて「はうらつ」にて、 本紀の崇神紀に、溢の字を用たり。古事記には「波布理」と仮字にかか 此物語におほき詞なり。「あぶれ」ともあり云々。 常にもい 日

すてはなつ心なり。東屋巻に、「『かうまどはしはぶるるやうにもてなす |余||玉かづらの巻に、「わか君をさる物の中にはぶらかし奉る」とあるも

> き給はぬ』」。 北の方、『つねにきせ奉れど、はぶらかし給ふにや、あくばかりえきつ こと』といみじければ」。落くぼに、「『夜いかに寒からん』との給へば、

ヤリッパナシニスル。ステモノニスル。 |雅訳||はぶれて、流浪シテ。 はぶらかす、俗のホカス。 ホオルは此詞の転也

「なごり」は、波凝の約れるか。ここは、源氏君の病のなごり残らずと ざる前よりナゴリヲシなどいふは、いといと転りたるにて理なし。さて きのおもかげに覚ゆるををしむ意也。然るを、今俗の言には、未わかれ 大かたは同じさまにきこゆ。ここは体言なる故に、又「のこらず」とは 気の遺れるをいふ詞也。「のこり」といふ詞も此語の転れるにやあらん、 先達「余波」の字にあてて解たるごとく、波の引さりて後に、なほ所々 ことなるなごり四十三丁オ(翻刻六七ページ)(釈)「なごり」といふ語は いへる也。 に海潮の遺れるをいふを本にて、何事にも、其物其事のはてたる後に其 いへる也。人のなごりををしむといふも、其人の去たるあとに、 其けし

に、「ましてほのきくわかき人は、しにかへりわらふ」。狭衣に、「しに にかへり思ひそめにし世中のあかぬことこそあはれなりけれ」。落くぼ しにかへり四十九丁ウ(翻刻七七ページ)「余」うつぼ物語楼の上に、「し かへりまつにいのちぞたえぬべき中々なににたのめそめけん」。

略なるべし。いせ物語に「すまふ力なし」といふに依るに、一度こりた さる意とは誰も見れど、猶まの語、 十五に「あはずまにして」といふも、只不逢しててふ意といふ人あり。 ぼし出るに、にくからず」といひて、 **こりずまに** 五十一丁オ (翻刻七九ページ) [新] 今夕顔に物ごりし給へど、 軒端荻をも猶忘れ給はぬは、又もあだ名は立給ふべしと也。「お 助辞とも聞えず。「こりずまひ」の 古歌を引、 面白し云々。万葉巻

後撰集に、貫之、「風をいたみくゆるけふりのたちいでてなほこりずま 釈しの説はいかがあらん。されどまの義はいまだ思ひ得ず。猶考ふべし、 の浦ぞこひしき」。 ることに猶すまひつよりて物をなすをいふ也。 これは須磨浦にいひかけたれば論なし。